

小田原史談

第175号 小田原史談会
発行所 小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0636

明治の書簡でつづる

相田軍曹と日清戦争(二)

無惨、澎湖島の戦い

瀬 戸 長 治

はじめに

早川村(小田原市早川)の相田代吉軍曹は、日清戦争に参加して、澎湖島にて戦病死した。

澎湖島は明治二十八年(一八九五)の講和条約で、遼東半島・台湾とともに清国から日本に割譲された島である。しかし、私は、その島が台湾海峡の中にあるという程度の知識は持ち合っていたが、それ以上の地理的・歴史的な知識は皆無であった。このたび『相田家文書』の中に「澎湖島の戦い」文書を発見し、自分の最初の外征が、子供の頃勉強したような単に勇ましくも美しいだけの感じってきた。さらに他の文書を読み進めていくうちに、日本開国後

戦いではなかつたということがいつそうはつきりしてきた。

『日本の歴史』(読売新聞)によると、「日清戦争による日本軍の死者は、一万七千余名である。そのうち病死

が一万一千名をこえたことは、満洲の厳しい寒さの中で多くの命が失われたことを示している。」とあるが、南方の戦場、澎湖島の死者についてはまったく触れられていない。しかし、『相田家文書』を読み進めていくうちに、澎湖島では寒さではなく不慣れな土地の疫病のために、尊い将兵の命が次々に奪われていったことが判明し、ここにいまだ日の当たら余年むかしの日清戦争が急に身近に感じられてきた。さらに他の文書を

はじめに		【相田家文書】について・「相田家系」略図		婚省申請書	
【相田家文書】について・「相田家系」略図		(早川村外四ヵ村組合役場より代吉あて)		(早川村外四ヵ村組合役場より代吉あて)	12月18日
弥生館に宿泊 相田代吉より弟相田穂吉あて	明治27年9月1日	(早川村外四ヵ村組合役場より代吉あて)	以上未記	(早川村外四ヵ村組合役場より代吉あて)	明治28年1月2日
無事入隊を祝し(穂吉より代吉あて)	9月5日	面会後 家族無事帰着(穂吉より代吉あて)		七日十時の面会について	2月5日
馬車鉄道で帰着(穂吉より代吉あて)	9月6日	(石田弥平より代吉あて)		★廣島から澎湖島へ	2月5日
浦賀町駅前(兄へ)穂吉より	9月10日				
駐留地移転便路(代吉より相田本家あて)	9月20日	出征の連絡(代吉より妻あて)			2月13日
慰問品の発送(代吉あて)	9月24日	話によれば台灣へ(代吉より妻あて)			2月23日
(石田弥五より代吉あて)	9月28日	乗船前(代吉より相田両家あて)			3月5日
鈴木喜左衛門の慰問文(相田代吉あて)	10月2日	馬關(下関)港にて(代吉より相田本家あて)			3月8日
駐留宅の礼状(代吉より妻あて)	10月2日	澎湖島の戦い(代吉より相田本家あて)			3月14日
(元代わづて穂吉より三郷・石井丈吉あて)	10月2日	海軍の參謀(代吉より穂吉あて)			3月14日
帰省用洋服持参の依頼(穂吉より代吉あて)	9月29日	鷹島に近接(代吉より穂吉あて)			3月21日
前村長死(代吉より妻あて)	11月4日	熱病に犯されて(代吉より妻あて)			4月14日
(東京)見物おいで(代吉より妻あて)	11月26日	(第八中隊部下一同より穂吉あて)			4月30日
留守宅の指手(代吉より妻あて)	11月26日	お悔やみ(米神廣石政吉より代吉妻)			5月1日
前村長死(代吉より妻あて)	12月20日	第八中隊長からの書簡(相田代吉家族あて)			5月1日
從軍記章之証(貢興局總裁)	12月20日	泰彭狀(足柄下郡兵事報勞会長)			9月26日
(根府川)麻井長郎より代吉あて	12月20日	從軍記章之証(貢興局總裁)			11月18日
		連戦連勝で華やかに見えた戦争のかげに、國家保護のためとはいえ、心のうちでは一日も早い帰省を待ち望んでいた家族の複雑な心境が強く読			

経験があり文書に長けた軍曹は、入當から死の直前まで丹念に家族に書簡を送りつづけていた。さいわいなことに当時の軍の検閲は、きわめて寛大であったようである。又、弟磯吉も筆まめに家族や商売の現況、早川や近隣の村々の様子を事細かに簡潔・的確な文章で書き送っていた。この貴重な多数の文書の中から、当主・修一郎氏の承諾を得て、とくに日清戦争に関する二九点の文書を公開していくことができた。小田原の歴史の一こまとしても、ぜひ末永く人々の記憶にとどめていただけることを期待してやみません。

なお氏名についてはすべて敬称を略させていただいた。

追記 海藏寺の参道にはいると、階段登り口の左側に、高さ約一五〇



相田軍曹慰靈碑 海藏寺山門入口

cmの台座部分の上に、高さ約一五〇cmの堂々たる石碑が立っている。関東大震災で倒壊し、U字の鉄かぎなどで繋ぎ直してあるが、表面の文字は「殉國陸軍歩兵二等軍曹 相田代吉碑 友人川島吉敏謹書」と読める。

川島吉敏は初代の早川小学校長で、代吉の書簡の中にもよく出てくるし、彼の書簡も残っている。裏面には、当時、村長を勤めていたと思われる杉崎甚五兵衛や弟磯吉など早川村民らしい十四名の氏名と石工二人・庭工・鳶それぞれ一人の氏名が刻まれている。その右側に所々欠けているが台湾列島・澎湖島・於馬公城没、明治□□八年八月一日建之ななどの文字が読み取れる。相田代吉の人望の程がしのばれる立派な慰靈碑である。

『相田家文書』について

現在、解説が終わつたものは、ざつ

刻まれていて、その右侧に所々欠けています。その右側に所々欠けているが台湾列島・澎湖島・於馬公城没、明治□□八年八月一日建之ななどの文字が読み取れる。相田代吉の人望の程がしのばれる立派な慰靈碑である。

と一六一点ある。その内訳は、

冊一 (水車業組合規約 明治二十三年度村委会議決件名報告)

状一五三 (内 はがき八七・表彰状二二・弔文二・封書の内容のみ

六二)

*はがきの内、賀状三十八 (下

郡長・小田原町議・弁護士・岩戸

長・海藏寺・久翁寺・正応寺の分を

封筒のみ六 (内容が散逸

含む)

と一六一点ある。その後任者が東京麻布第三聯隊の兵営にかけて業務上の指示を受けるという一幕もあった。又、書状の差出人を見ると、代吉の交際範囲はかなり広かつたことがうかがえる。

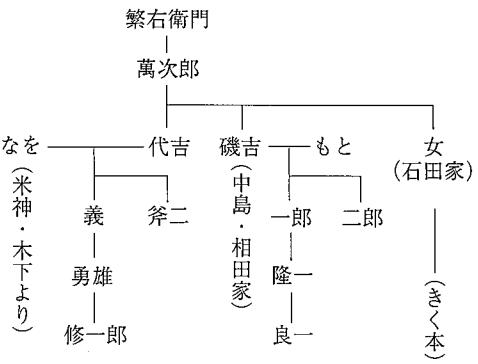
相田家では、代吉出征のあと、弟磯吉が酒造業を営みながら、密柑の出荷や農林業を手広く営んでいた。本家では妻のなを、義と斧二の二児と老母、別宅では弟磯吉と妻のもとが、磯吉を中心に両家が一体となり、代吉の無事凱旋を信じてその留守を一生懸命に守っていた。また、家族は代吉の移動の節々で、面会に行くことを唯一の楽しみにしていた様子がよく分かる。

代吉の滞在地は七か月の間に、芝区高輪の弥生館→東浦賀→東京麻布龍土第三聯隊→廣島→金州丸上→澎湖島と移動していく。その中で本人の書簡は、廣島以降のものが最も多く一か月の後、無念にも疫病に倒れる。この七か月間の軍営生活の様子や代吉・家族・関係者の心情の変遷が、とにかく筆まめな代吉・磯吉兄弟による簡潔・的確な往復書簡や、関係者の書簡からたどることができる。とくに「澎湖島の戦い」は圧巻である。

入営前の相田代吉は、早川村外四ヶ村組合の収入役を務めた。代吉の死後、磯吉が早川村の収入役や村長を務めた。なお、磯吉は中町にある現・相田酒藏店(知恵袋)の創業者である。二郎は、大正・昭和期の歴史学者として著名。主著に『中世の関所』『蒙古襲来の研究』『日本古文書』『相田二郎著作集』三巻がある。明治二十七年二十八日付文書の石田弥五兵衛は、「さく本」の初代當の前後に村長の

交替や、前村長の死亡などがあり、後任者が東京麻布第三聯隊の兵営に

相田家家系略図



☆弥生館から浦賀へ

明治二十七年八月一日、日本は清國に宣戦布告した。召集された代吉は、同三十一日出発、九月一日増上寺に集合し、弥生館に宿営した。それからの十数日をここで過ごし、家族や友人・知人に面会したり、書簡を交換したりしている。また、組合役場の後任者(関係文書から代吉の後任は、最初は木下権次郎、その後が弟磯吉であつたと思われる)との業務連絡も行われている。

萬次郎は早川邨戸長、代吉は早川村外四ヶ村組合の収入役を務めた。代吉の死後、磯吉が早川村の収入役や村長を務めた。なお、磯吉は中町にある現・相田酒藏店(知恵袋)の創業者である。二郎は、大正・昭和期の歴史学者として著名。主著に『中世の関所』『蒙古襲来の研究』『日本古文書』『相田二郎著作集』三巻がある。明治二十七年二十八日付文書の石田弥五兵衛は、「さく本」の初代當の前後に村長の

九月十五日、陸軍は朝鮮の平壤を占領し、海軍は黃海で北洋艦隊に勝っている。弥生館にいた代吉たちは、二十日から十一月上旬まで、三浦郡の浦賀に出張し、飯田・深井・石井の三軒の民家に宿泊し、軍事訓練に従事していた模様である。

弥生館に宿営

(宛名)

足柄下郡早川村

相田磯吉様

人

東京芝区弥生館

出

歩兵第八中隊

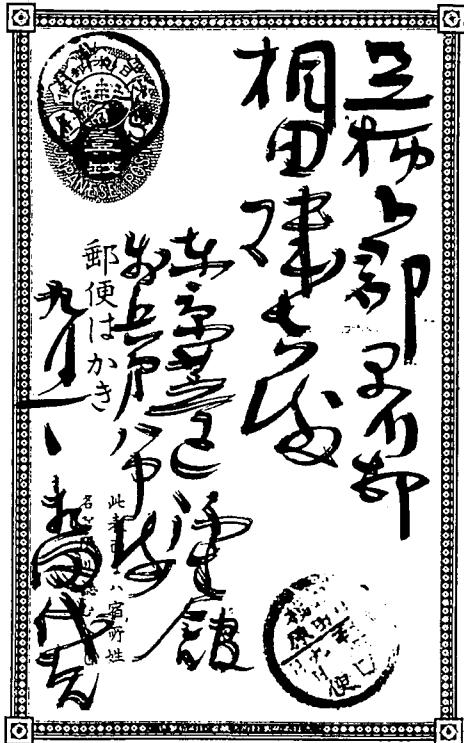
差

九月一日 相田代吉

(文面)

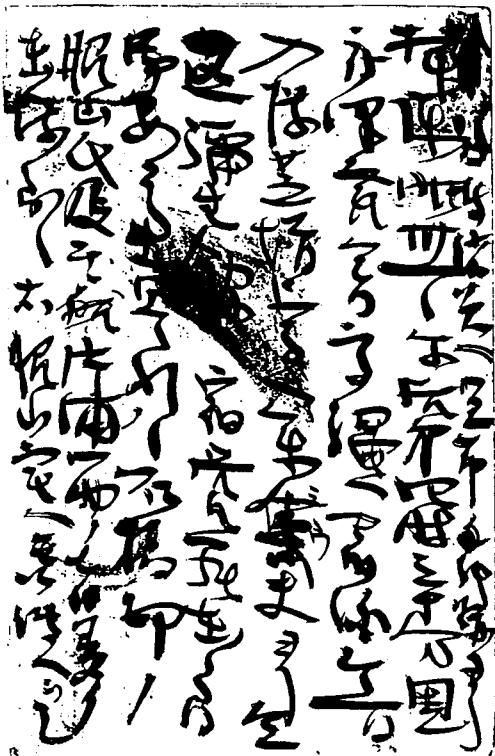
役場諸員へ宣敷。□□□ヨリ

拝陳 昨三十一日、午後第四時三十



弥生館に宿営（相田代吉より弟磯吉あて）

明治27年9月1日付



一分国府津発、今日高輪へ□□同日
入隊、芝増上寺へ參集、夫ヨリ同区
弥生館二宿営まかりあり候間、ご安

慮下されたく候。石橋邨ノ脇山氏及
びその後片浦筋ノ者多く在隊いたし
候。右脇山氏宅へモ御伝ヘヲ乞

(著者) セト・ちようじ
大正十五年(一九二六)生まれ。

県立小田原中学校・法政大学を卒業。
足柄市市史編纂調査員。小田原市酒
匂に在住。著書『足柄平野にたどる
二宮金次郎の足跡』・『文命堤碑を考
える』(足柄市史研究誌「あしがら」六
号)

号

〔編集付記〕

今まで一般にその存在が知られていない
かった『相田家文書』が、今回日の目を
みるようになったのは、昨年の十月、当
会主催の早川の歴史散歩で海蔵寺を訪
れたのが切っ掛けになつていて

藤志利さんが、「どうも読むのが難しくて
當時、海蔵寺の佐藤實英住職が出した書
簡が披露された。相田家には、このよう

に読めない文書が多数残されているとい
うことがわかつた。

この話に動かされたのは、当日、講師
を務めた青木良一氏であった。
調べてみると相当な数で、短期間で自
分一人ではとても解説できないと、早川
小学校時代の恩師瀬戸長治先生の許に持
ち込んだ。瀬戸氏は早速解説に着手した
経緯がある。

*脇山氏 脇山伝吉のこと。相
田代吉の戦病死した澎湖島の戦
いまで、二人は必ずと同じ隊か
近くの隊について行動していた模
様。住所は、小田原市石橋一一
一、現当主は脇山岩雄。

小田原叢談

石井宮之助

(三十四)

せ、大園遊会を開き、東京からよんだ芸者と地元の芸者を手古舞姿に仕立てて町の中を練り歩かせたという豪勢振りを示した。

そのくせ金はあまりなかつたらしく、屋根屋の門松さんを呼んで、「屋根代が半分しかない。あとは当分

北原白秋の「雲の歌」

昭和三十一年(一九五六年)五月二十六日、郷土文化館に白秋記念室が増築され、傳

赤い瓦がふけたぞなも
し

肇寺境内に「赤い鳥小鳥」の童謡碑が建設されて、菊

と書いてある。

子未亡人ほか東京の関係者、鈴木市長をはじめ小田原の関係者多数参列のもとに、その落成式と除幕式が盛大に行われた。

この時菊子未亡人からいられたの遺品や資料が寄贈されたので、地元の資料とあわせて記念室に常時展示することとしたが、その中に白秋門下の人たちも知らなかつた珍しい掛軸と短冊が出品された。

落成した時、白秋は実にはな落成式を行っている。まずみずからデザインした印し半天を職人全部に着

ちょうどそのころのことである。わたしは小田原駅で小田中時代の恩師堀江重治先生にばつたりあった。堀江先生は白秋記念室建設のことを知つていて、わたしのところに白秋の原稿があるからあなたにあげよう。図書館の資料にして、

原稿は白色、けいなしの便箋四枚にペンで書かれたものである。

百舌なれば
紺の腹がけ新しき
若き大工も涙ながしぬ
いう短冊と印し半天が
保存されていた。

これは始めて見るものだ
といつて東京の人たちは驚いていた。

ちょうどそのころのことである。わたしは小田原駅で小田中時代の恩師堀江重治先生にばつたりあった。堀江先生は白秋記念室建設のことを知つていて、わたしのところに白秋の原稿があるからあなたにあげよう。図書館の資料にして、

記念室に展示してはどうか
といった。

ある時、白秋の使の者が中学校へ来て、雲の歌を作りたいので、何か雲に関する本を二三冊貸してほしいということだった。何冊か貸してやつたが、やがて本を返しに来、それにつけてよこしたのがこの原稿である、とあつた。

原稿は白色、けいなしの便箋四枚にペンで書かれたものである。



みみづくみみづく春の
仕度にかかりやんせ、

北原白秋童謡館オープニング記念ポスター

その一本は門松福太郎さん所蔵のものである。半折の下部に門松さんの半身像を書き、その上に、

水脈の泡波うろこ雲 (C.K) Cirro-Cumulus 卷層
みをあはなみ
いつも夕焼 月あかり

青空高う散る雲は
纖い卷雲 真綿雲
鳥の羽のやうな靡き雲
白い旗雲 離れ雲 (C.S) Cirrus 卷層

ひとはけふたはけ
すうと幕引くレエス雲
日量月量湿らせて

春さきの雲 氷雲

北原白秋

雁が飛びますわたります (K.C)Cumulo Cirrus 積巻

日の環月の環かがやかす

高い層雲 帷雲

灰いろ雲の濃い雲も

たまには薄すり青の帶

(S.C)Strato Cirrus 層巻

葡萄串の霧の雲

水と天との間の雲

風の層雲 わかれ雲

地にはとどかず棚の雲 (F.S)Fracto—Stratus 離層雲

寒い黒雲、冬の雲

かぶさりかぶさる雲の塊

時どきお母さんの眼のやうな
青いお空を透かして (S.K)Strato Cumulus 層積

むくりむくりと湧く峯は
雲のヒマラヤ 銀のへり

お経もらひか 天竺へ

犬、猿、坊さま、豆の馬 (K.C)Cumulus 積
雷雲はおそろしい
晝も神鳴り 早雲
宵には稻妻 朝は虹
おどろおどろの暴風雨雲 (K.N)Cumulo Nimbus 積乱

早い飛雲 日の光

それでも雨雲乱れ雲
雲がふります雪がふる
ぱらく 露もころげます

(N.)Nimbus 露

わたしはこの原稿を見た
時、まことに各節の雲の末尾に
その雲に相当する学名が書

「雲の歌」は大正十一年
(九三) 六月に出版された
第四童話集「祭の笛」第二
部「空のうた」の中に載つ
てある。

「白秋全集」第九巻によれば、雲の名前はそれぞれの
ところに番号をふり、それを最後に註として一括してある。

この中で、(7)片層雲は原稿では離層雲となつてお
り、(11)片乱雲は積乱雲となつていて、あとで訂正され
ている。堀江先生から雲の本も入つていて、あろう、それを借
りて天文気象の本も入つていていたであろう、それを借
りてそのままの表装展示しておいたが、インキの色がだんだん薄れてきたので、それを引き上げて大事に保管している。(続)

東欧四力国を旅して(2)

西野 明

いぢこも同じ?

プラチスラバのドナウに
架かる橋脚で見つけた落書き

ドナウの橋脚の落書き

プラチスラバのドナウに
架かる橋脚で見つけた落書き

ドナウの橋脚の落書き

きである。プラチスラバと云つても馴染みがないが、
スロバキアの首都である。
小田原でも今年になつてからだつたか、落書きを目にするようになつた。いづこも同じと云うことになるがしかし、仔細に検討してみると違いがある。

小田原のそれは、栄町の繁華街のシャツターや建物、構造物と所からはず落書きがしてある。その悪戯の跡を見れば一人の仕業のようと思われる。

それによると、プラチスラバの方は、可愛いのがある。落書きは人通りの少ない野放団なものである。どうせの落書きは、少年らしさに欠け、しかも制約のない野放団なものである。どうせの落書きするならば、見る人の目を楽しませるような美的なもので、落書きする人の才能を窺えるものにして欲しいものだ。



小田原のそれは、栄町の繁華街のシャツターや建物、構造物と所からはず落書きがしてある。その悪戯の跡を見れば一人の仕業のようと思われる。

それによると、プラチスラバの方は、可愛いのがある。落書きは人通りの少ない野放団なものである。どうせの落書きは、少年らしさに欠け、しかも制約のない野放団なものである。どうせの落書きするならば、見る人の目を楽しませるような美的なもので、落書きする人の才能を窺えるものにして欲しいものだ。

(続)

(5)層巻雲 (6)層雲
(7)片層雲 (8)層積雲
(9)積雲 (10)積乱雲
(11)片乱雲 (12)乱雲

りてまず自然科学的知識を身につけ、そこから自由無げな詩の世界に遊ぶという一面がうかがわれ、その意味でこの原稿は一段とおもしろいものと思うのである。

図書館ではさっそく表装展示しておいたが、インキの色がだんだん薄れてきたので、それを引き上げて大事に保管している。(続)

曾我谷津の曾我氏と

曾我氏とその末裔 (8) 付 菊川の事

市川一郎

はしがき

宗我神社

一本宮

曾我氏台頭

曾我氏の出自

北条時代

(小沢大明神) (八幡神社) (桓武社)

豊臣氏時代 德川時代

明治時代 社殿の改築と無格社の合祀

曾我都比古神社と唱えられなくなつた時期

日本武尊命石板奉納

(以上 一六八号)

付

旧阿弥陀堂の所在地 (以上本号)
五 菊川稲荷
付 曾我神社と曾我氏の歴史総合年表

表。

此の地震は元禄十年(充七)十月の関東諸国の震災であろう(理科年表)。

御先祖祐信公石碑大地震にて損傷し、別家、曾我播磨守、元禄年間に修復再興した。

二代 広次 八左衛門 七代
元禄四年(充二)八月卒
御先祖祐信公石碑大地震にて損傷し、別家、曾我播磨守、元禄年間に修復再興した。

下畠三畝二十六歩、他に曾我堂地所屋敷十八歩計三箇所を永代御除地とせらる。他に近傍で田畠三十石を買い求めた。
二十代 祐直 八左衛門 六代
天和三年(充三)正月卒
代々名主を勤める

太郎 九代
宝暦十一年(充一)五月卒

安永四年(充五)三月卒

延清村に三十石の田畠を買

た。その際祐信公供養の為め、山畠四反四畝十六歩、字殿沢で

田畠三十石を買

い求めた。

別家の曾我一統にこれ

まで疎遠にしていた事を戒め、

曾我播磨守、曾我又右衛門、曾

我七兵衛、同熊之助、同帶刀に

先規のとおり御先祖を大切にす

るよう申し渡した。

祐房は武道に優れ、領主大久

保公に認められ、度々馬で来訪

された。山畠四反四畝十六歩は

字大山窪にあり場所が悪く作物

の実りが悪いので、領主大久保

公に交換を願い、御林と交換さ

れた今の平地がそれである。

大山窪は曾我山系の最高不動山三二七・七尺付近である。交換された今の大山窪は曾我谷津字浅間山一〇八番地から一一六番地まで連続していると考へると、六反七畝十八歩で標高九〇メートル位である。五割ほど広いが此の辺りから上は大部分殿様の御領林であつたので、此のような事もあつたと思われる。(図一 一六八号)

十七代 祐広 八左衛門 三代
寛永四年(充二)六月卒
弟 広通 伊兵衛 村内市川
伊兵衛方に養子縁組
広治家を継ぎ名主を勤める。
弟広通内市川氏に縁付いた
が、二三代祐安幼少のため成長
し、村名主となる。

十八代 祐一 五郎兵衛 四代
寛永十一年(充三)十月卒
十九代 祐頼 八左衛門 五代
祐頼家を継ぐ、代々名主を勤
める。萬治二年(充五)田畠地
所御改めの際古城地、掘跡等先
宗我神社と神主

宗我神社創建時代 北条氏時代

徳川時代 幕末(神主養子縁組・宗

我播磨守の住所)

明治以降略譜・御

文配関係

(以上 一七〇号)

二二代 広治 善太夫 八左衛門
宝永四年(充七)八月卒

弟 広通 伊兵衛 村内市川

伊兵衛方に養子縁組

広治家を継ぎ名主を勤める。

弟広通内市川氏に縁付いた

が、二三代祐安幼少のため成長

し、村名主となる。

田畠、所領残らず祐安に渡し、

男子と共に養家に移り、娘は祐

安の嫁にした。

二三代 祐安 広房 幼名 富

祐吉家を継ぎ名主を勤めた

が、村内の不法者連判し、解任

月卒

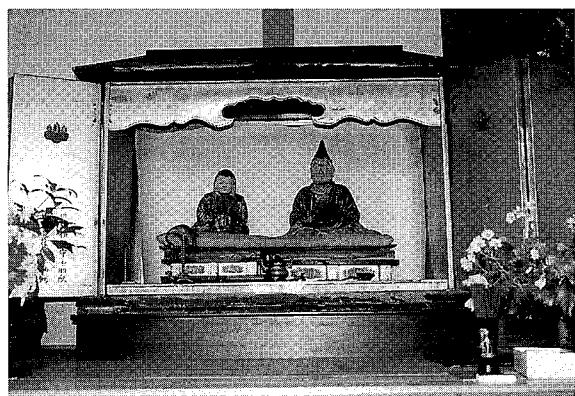
二五代 祐吉 八左衛門 十一

代 寛政十一年九月(充九)三

月卒



神保家の阿弥陀堂



曾我祐信夫妻像（阿弥陀堂内）

たき旨大磯本陣から申し來たり、同人宅まで出向いたところ、祐信公石碑に参詣致したき旨申し聞かされ、御刀一腰、御馬一匹代、銀拾両奉納された。その他内召使に至るまで心付けがあり、小田原本陣焼失のため山角町平野屋まで同道し、暇乞いをした。

文政二年（一八一九）三月、曾我兵庫、曾我伊賀守、曾我豊後守、曾我熊之助代参大西左右衛門、曾我兵庫殿御隠居又甫殿から御香料の御奉納があった。

文化十二年京都御勤役の曾我豊後守御上京のおり、面会致しきられたが、官林盜伐の事件発生し、その責めをおつて名主を

祐長 家を継ぐ名主を仰せつけられたが、官林盜伐の事件発生し、その責めをおつて名主を

二六代 祐長 団次郎 十二代
卒年不祥

二七代 祐重 富太郎 十三代
卒年不祥

二八代 祐勝 鴨次郎 十四代
明治十五年（一八八二）十二月卒

二九代 祐明 久太郎 十五代
明治二十一年（一八八八）九月卒

三十代 祐忠 忠次郎 十六代
明治三年（一八七〇）三月九日、祐信公七百年回忌追善供養を行ふ。

三一代 正平 十七代
昭和四二年（一九六七）八月卒

三二代 厚 十八代 当主
平成七年（一九九五）現在

四 旧阿弥陀堂

阿弥陀堂 壱軒 百姓	（二八代）鴨次郎抱
堂地 高 八升一合	
此反別 弐拾五步 御除地	
高壠斗五升 御供え御除地	

（寺請証文 慶應四年）

ることが出来る。

現在の神保家屋敷は、後出の菊川稻荷大明神の遷宮された文化二年（一八〇五）以前に出来た新屋敷である。我谷津四七三番地の裏庭あたりと推定される。

阿弥陀堂の旧所在地について次のような根拠から、筆者市川一郎宅（曾我谷津四七三番地）の裏庭あたりと推定される。

明治初年の地積図と旧課税台帳にある曾我谷津四八二番地の芝地で、現在は市川家の裏入口と裏庭二十五歩であつて、次に示すように寺請証文の阿弥陀堂堂地二十五歩と符合する場所である。この二十五歩は十九代祐頼の代に、永代供養地として除地にされた曾我堂地所屋敷十八歩に相当する。

母は「此の地所は堂屋敷といわれて居るが、気にしないで欲しい」と言つた。

十五代祐吉が「屋敷内に祐信公を祀る曾我堂（阿弥陀堂）を建てた」とあるから、阿弥陀堂の旧所在地から、十五代祐吉の住んだ元屋敷を知

の訴えをしたが領主役所で逐一吟味の結果、村内頭取を始め悪心の者は処分され、寛政十年二月まで小田原伝馬助御肝前役を仰せ付けられ相勤めた。この期間中、高額な金額の相違が出来、止むなく田畠を売却して返却した。

この事件中と思われる天明二年（一七八二）の一時期、名主が金右衛門に変わっていた。

祐信公六百年回忌享和元年（一八〇一）に当たるが、わけあって延引し、文化十三年（一八一六）八月二九日から閏八月五日まで、曾我堂で十七日間別時念佛供養が塔ノ峯阿弥陀寺の導師によって行われた。

此の間、曾我伊賀守代参用人林林左衛門、曾我兵庫殿用人三宅多仲、曾我熊之助代参大西左右衛門、曾我兵庫殿御隠居又甫殿から御香料の御奉納があった。

文政十二年京都御勤役の曾我豊後守御上京のおり、面会致しきられたが、官林盜伐の事件発生し、その責めをおつて名主を

以上的内容で系図は終わつている。
二九代 祐明 久太郎 十五代
三十代 祐忠 忠次郎 十六代
明治三年（一八七〇）三月九日、祐信公七百年回忌追善供養を行ふ。

文政二年（一八一九）三月、曾我兵庫、曾我伊賀守、曾我豊後守、曾我帶刀、曾我熊之介によつて祐信公の木像が再興され、曾我堂におさめられた。

阿弥陀堂の旧所在地について次のようないきさつがある。我谷津四七三番地の裏庭あたりと推定される。

現在の神保家屋敷は、後出の菊川稻荷大明神の遷宮された文化二年（一八〇五）以前に出来た新屋敷である。我谷津四七三番地の裏庭あたりと推定される。

藩札の研究

各藩で発行された紙幣の諸問題(2)

谷口得二

藩札の嚆矢

藩札発生以前の私札

江戸時代中期の藩札

(以上一七四号)

享保十五年再び札銀の通用許可

江戸時代後期の藩札

藩札通用の妨となる贋札

(以上一七五号)

西川廻舎で発行の小田原藩札

藩札一覧表

享保十五年再び札銀の

通用許可

宝永の禁止令では山田神領の「山田羽書」のみが特別に許可された。俄に「羽書」の引替えは難渋ゆえ懸命の渴命により許可された。かくして二十三カ年間、享保十五年(一七三〇)禁令の解禁まで、藩札は姿を隠したが、享保四年(一七二九)金銀改鑄があり、「乾字金」通用停止で通用中の「山田羽書」は多大の影響を受け、対策のために「新金羽書」が発行された。享保十五年

六月、幕府は諸藩の乞いを聞いて再び札銀の通用を許可した。二十五万石以上二十五万石、二十万石以下は十五カ年と期限を附して解除されたのである。米価引き上げのためともいわれる。この幕令の出るや疲弊に苦しめる諸藩は急いで札遣いを再興した。宇和島藩のときは解除の六月には早くも再発行、それは元禄札を引出し再使用、徳島藩も延宝札に享保押印して再使用、備中松山高梁藩も同

上、しかしこの再開の令に、以前は札遣いをしていたのに中止したのは、平戸藩、高知藩、会津藩、仙台藩、名古屋藩、水戸藩、麻田藩があり、これに反して、新しく札遣いに参加したのは、備中成羽藩、大洲藩、彦根藩、中津藩、新見藩、足守藩、園部藩、高取藩、神戸藩、菰野藩などの諸藩があり、大体、以前の札遣いの藩は再興した。それ以

下、年数が経つ程、新規の発行藩が増加して行った。享保十七年(一七三三)の広島・岡山地方の大虫害は経済危機を招き、ために札遣いに一悶着が起きた。元文元年に(一七三)に元文金銀吹替えがあり、ために藩札が受けた影響は特筆すべきものがあつた。延享二年(一七三五)は小藩は第二回目の許可期限である。藩は断絶を恐れて二年くらいより継続許可を申請した。宝永の禁令に痛い目にあつたところが多く懲りたのである。そして、新札発行に際して最初の許可年たる享保十五年を記し、以下何回目の新発行においても、その儀を記した札が多くなつた。かくて藩札は増加するばかり、故に宝暦九年(一七五九)幕府は新規發行中止を発令した。宝暦年には金沢、秋田藩の新規發行があり、大藩の事とて有名である。安永三年(一七四四)幕府はさらに禁令を出し藩札を弾圧した。たとえ中絶と仮称すると、いわゆる文化、文政時代という円熟期

対応するが如く、藩札もよく流通したが、嘉永六年(一八五三)米艦の来朝するに及んで、天下太平、藩札もよく流通した。しかし、札は沿岸防備、武器調達の資金に必要欠くべからざるものとなり濫発のために引替え不能、札座閉鎖など、いろいろの事件を惹起した。藩札、意の如くならず物価騰貴、札価下落、騒動

対応するが如く、藩札もよく流通したが、嘉永六年(一八五三)米艦の来朝するに及んで、天下太平、藩札もよく流通した。しかし、札は沿岸防備、武器調達の資金に必要欠くべからざるものとなり濫発のために引替え不能、札座閉鎖など、いろいろの事件を惹起した。藩札、意の如くならず物価騰貴、札価下落、騒動

江戸時代後期の藩札

文化以後明治も後期時代と仮称すると、いわゆる文化、文政時代という円熟期

天明飢饉に発行を見た「仙台天明飢饉札」、享保十一年(一七三五)頃に始まる「長崎唐館銀札」などは、特殊なものといえよう。

天明飢饉に発行を見た「仙台天明飢饉札」、享保十一年(一七三五)頃に始まる「長崎唐館銀札」などは、特殊なものといえよう。

の起きたところが沢山出来た。重大事件を起すと、文政八年(へい)幕府の金銭改鑄があり対策のために新札を出し、切り抜けたところが多い。

天保七年(へい)十二月、幕府は、またまた禁令を発令し、宝曆、安永、寛政と禁令を出したが、近年猥らになり米札、酒札など紛敷名目をもつて札遣いは心得違いなきよう、と令された。幕府の札に対する制禁の寛厳は幕府銀貨の盈縮に規制されたごくである。

しかし幕威も漸く西に傾き禁令も空手形同様で、濫発は悪質を帯びて来た。幕末には監督も内外多事のため、その効果もここまで及ばなかつたので、宮家寺社、村、組合、私人の私札類が人足切手、貸錢手形、材木、酒、醤油等の名目で全国各地に発行を見、全く紙幣時代となつた。

幕府も遂に慶応三年(へい)五月、幕府自ら紙幣を発行した。同年八月、銀座名義で「江戸・横浜通用金札」、同年十月に「関八州国内限り通用金札」、前者は武拾五両、拾両、五両、壹両の四種で、後者は武百両、百両、

五拾両、武拾五両、壹両の五種であり、ともに三井組が兌換業務に当たるものであつた。一方、関西でも、十一月に、「兵庫開港金札」が発行されている。百両、五十両、武拾五両、壹両、弐分、壹分の六種で、幕名により、大坂の富商二十人により設立した商社が発行元である。

これらは、同年十月十五日の大政奉還により、幕府は瓦解し、ほとんど通用せず終つた。

これより先、幕府倒壊の危機に直面して各地共、札は右より出て左に受け取る状態、伏見の一戦の敗報が伝わるや、官軍の威勢猛烈を加え、人々は寸刻を争い札場に殺到、夜を明かして間に返すと領民に約束して一時は鎮まつた。後これらのは幕府へ届出で発行のものは明治政府の負債となりた。地方の札元が沢山

倒産したのは、この時である。特に私札発行の家は激しかつた。

明治政府と藩札

明治維新となり、新政府樹立と共に藩札はそのままで暫時新通貨の出来る迄通用、高額の札は、新政府の新貨に換算の上引き揚げられた。そして、増發や新規

発行は差止められたが、維新の混亂期にて内密に増發したところもあつた。明治四年(へい)七月、廢藩置県と共に藩札は政府の負債となり、同六年(へい)二月、旧藩札に大蔵省押印通

用の達しがあり、小額は押印されて当分通用した。

しかしながら政府紙幣類

が出現すると共においおい藩札は引き揚げられ、同十二年(へい)六月、満五カ年の長年月を経て漸く藩札回収が完了したのである。

いわれるが、名君が財政建

て直した藩もあり、国産販売と結び付けて利益をあげ、健全な札遣いのところもあり、豪家を利用し流通の拡大をはかり、または大坂の商人を札元に加えるなど、信用の維持に努めた。

「和歌山藩松阪札」は三井組の取り扱いで評判がよかつた。流通強化策として調達講や富籠興業を利用して、渡金は自藩の銀札を利用したところもあり、福岡藩の大坂間、秋田藩の大坂間の為替形式の藩札は秋田より現金を持参せずとも大坂で札と現金と替つたので、正金より藩札を喜ぶところも出来た。「松江連判札」の如く「質地改」と記し、質物を入れて替であると立証し、流通上の安全を公示したところもある。

藩札通用の妨となる藩札妨げとなるので秘密の絵画や隠し文字を入れたものがあり、福井藩札用紙を漉いた越前五カ村は、「留紙」といつて福井藩札と同じものは誓紙を職人にまで藩に入れさせて絶対に滲き出さぬ定めであった。大藩は専属の立派な点は芸術品ともいわれよう。神代文字、梵字、蘭語を入れたものもあり、透しは徳川中期の札に種々漉入れさせた。摂津名塙産の藩札用紙は特に美麗である。司馬江漢作の銅版で印刷した足守藩札、鹿児島藩も當時、すでに銅版印刷、西洋インキを使用して藩札を発行している。その紡績機関方、同開拓方の藩札は珍らしい札の雄と云つてもよいものである。(続)



小田原藩札



小田原の富士信仰 四

小林謙光

けんこう

郎氏の尊父六三郎の代に、須走の芹沢と言う人が毎年浅間神社のお札を持参し祈祷してゆき、謝礼にお米を上げたという。近在を廻ったということである。

飯田岡の飯田神社境内には明治四十年(一九〇七)建立の富士山大神碑がある。碑文は扶桑玉産(富士玉産)書

である。扶桑教大講義高橋元次郎(慶應三年生れ)、先達石田三行(斑目)

中島彦太郎(堀之内)、芹沢新太郎、

一明正彦、櫛田萩右工門(柏山)、岩

田兵太郎(柏山)、世話人香川市五郎

以下六名、寄付者高橋師原以下六十

二名の名が刻まれ、飯田岡、三竹、

久野、荻窪、沼田、北ノ窪、清水、

堀之内、中曾根、成田の村名と氏名

が刻まれている。

この地域には安政から万延年間に

丸花講があつた。丸花講の最も新し

い碑は明治五年であるが、明治三十

二年、全四十年には丸岩講の碑が見

られる。丸花講は次第に衰微し丸岩

講が台頭して来ている。

柏山及び飯田岡の碑に見られるよ

うに斑目の石田三行(參行)、柏山の

柳田萩右工門、堀之内の中島彦太郎

らの先達は地域的な交流があつたよ

うである。

成田三島神社境内には明治十一年

(一八七八)再建の浅間大神碑がある。

大正十二年関東大震災で大破し翌年

建設したものである。碑文は富士玉

産書である。因に、三島神社の祭礼

帳(明治十五年)は富士玉産書である。

成田には先達大講義鈴木茂三郎(弘

化三年生れ)、大講義成田常次郎(安

政二年生れ)らが明治期に活動した。

西大友には仙元大菩薩がある。碑文

の裏面が全開補強されているので建

立の年は不明であるが、碑文から推

はじめに

足柄のふじ道と富士講

一 丸東講

(一) 丸東講のおこり

(二) 丸東講の分布 (以上一七二号)

(三) 丸東講の先達

(四) 小田原市の丸東講

(五) 足柄下郡箱根町の丸東講

(以上一七二号)

(一) 丸岩講のおこり、(二) 丸岩講の組織、(三) 丸岩講の先達、(以上一七四号)

(四) 小田原市の丸岩講

(一) 東講の系譜と分布 (以上本号)

(二) 小田原市の東講、(三) 東講について(考

察)

三 東講

(一) 東講の系譜と分布 (以上本号)

(二) 小田原市の東講、(三) 東講について(考

察)

四 その他の講

(一) 丸花講、(二) 丸嶽講、(三) 丸藤講、(四) 丸

福講、(五) 小田原竹の花の講、(六) 足柄郡

壇中、(七) その他、

(四) 小田原市の丸岩講

(一) 柏山、堀之内、飯田岡地域

柏山神社境内には丸岩講中が明治

三十二年(一八九〇)建立した浅間大神

碑がある。碑には足柄上郡川山村北

産、富士東表口中畑新道開山大講義

石田又次郎、足柄下郡富水村堀之内

桑原三島神社境内には明治十一年(

(一九〇九)再建の浅間大神碑がある。碑文

は書体からいつて明らかに富士玉産

書である。山北町岸の和田家蔵の明

治二十七年講社人名一覧表には村山吉太郎以下二十名の名が見える。村山吉太郎は嘉永元年生れで明治二十年試補、明治二十八年權大講義になつてゐる。奥津房次郎は明治二十八年權訓導であつた。その後、村山一良が先達になつた。一良は村山当主健三氏の父で明治二十九年生れ、富士登山歴四十三度、須走口七合五勺の石室(現八合目江戸屋当主菅沼善次郎)を定宿としていたといふ。昭和四十二年満七十一歳で没した。富士山に因んで富嶽院登譽良宣居士という戒名がつけられている。

位牌の一つは石室主が祀るからといつたので七合五勺と呼称していた当時

は父万三(かずみ)が石室をやつており確認できなかつた。村山家にはお伝え「富士山烏帽子岩直傳」が現存し、裏庭の富士山が見える場所には浅間

大神碑が建立されている。

成田三島神社境内には明治十一年

(一八七八)再建の浅間大神碑がある。

大正十二年関東大震災で大破し翌年

建設したものである。碑文は富士玉

産書である。因に、三島神社の祭礼

帳(明治十五年)は富士玉産書である。

成田には先達大講義鈴木茂三郎(弘

化三年生れ)、大講義成田常次郎(安

政二年生れ)らが明治期に活動した。

西大友には仙元大菩薩がある。碑文

の裏面が全開補強しているので建

立の年は不明であるが、碑文から推



浅間大神碑

(安政七年・上曾我須賀神社境内)
小田原市で最も古い丸岩講碑

定すると明治以前のものである。明治二十七年の講社人名一覧表には鈴木太助以下二十一名の名が見え、当時、講は盛んであった。先達鈴木大助(天保十年生れ)は明治十八年試補、明治二十八年大講義。全高野清右工門(天保五年生れ)は明治十八年試補、明治二十八年中講義になつてゐる。他に松嶋為次郎(嘉永五年生れ)、古宮半内(天保九年生れ)らが活動した。鬼柳白山神社境内には明治九年(一

全)再建の浅間大神碑があり寄進者丸岩の講紋がある。

③上曾我、下堀地域
上曾我須賀神社境内に安政七年(一八六〇)建立の浅間大神碑がある。丸岩講中、先達小酒部伊兵衛、講中柏木幸治郎以下十名の名が刻まれてい

る。碑の風化が激しく判読し難い。碑文は書体から見て富士玉産と推定される。台石には丸岩の講紋がある。

明治二十八年大講義。全高野清右工門(天保五年生れ)は明治十八年試補、明治二十八年中講義になつてゐる。他に松嶋為次郎(嘉永五年生れ)、古宮半内(天保九年生れ)らが活動した。鬼柳白山神社境内には明治九年(一

全)再建の浅間大神碑があり寄進者丸岩の講紋がある。

④町屋、沼代、小竹、小船地域
町屋浅間神社境内に富士浅間大神碑がある。碑には丸岩先達椎莖平八郎、登山四十八度記録と刻まれている。碑裏に「文久元年十一月曾祖平八郎富士登山四十八回ヲ記念シ碑ヲ

吉田口ニ立テ同時當神社ニ納建スル來幾春秋碑体漸ク損傷セルヲ以テ明治廿二年十二月復舊ス超テ大正十二年九月一日大震災ノ為ニ倒潰シテ今三十九年に丸岩講少講義林林蔵が建立したものである。講社のお伝えによれば「明治十九年丙戌年五月富士一郎謹書時十七年、授与之相州沼代村片木叢蔵先達結社林林蔵殿へ者也」とある。富士玉産の息子一郎が書いたものである。片木叢次郎の墓が沼代福泉寺にあり權訓導片木叢次郎明治二十六年三月九日世寿六十三歳と刻まれている。

小竹下に庚申塔や石仏などと共に浅間大神碑(明治六年再建)がある。丸岩講の下講中が建立したものである。碑裏に不二玉産の銘がある。話人加藤清吉以下九名の名が刻まれている。碑裏に「時宗の開祖一遍とその開祖他阿真教」「露國・日露の役辱虜のこと」の二編は次号に回ります。

明治二十八年大講義。全高野清右工門(天保五年生れ)は明治十八年試補、明治二十八年中講義になつてゐる。他に松嶋為次郎(嘉永五年生れ)、古宮半内(天保九年生れ)らが活動した。鬼柳白山神社境内には明治九年(一

全)再建の浅間大神碑があり寄進者丸岩の講紋がある。

④町屋、沼代、小竹、小船地域
町屋浅間神社境内に富士浅間大神碑がある。碑には丸岩先達椎莟平八郎、登山四十八度記録と刻まれている。碑裏に「文久元年十一月曾祖平八郎富士登山四十八回ヲ記念シ碑ヲ

吉田口ニ立テ同時當神社ニ納建スル來幾春秋碑体漸ク損傷セルヲ以テ明治廿二年十二月復舊ス超テ大正十二年九月一日大震災ノ為ニ倒潰シテ今三十九年に丸岩講少講義林林蔵が建立したものである。講社のお伝えによれば「明治十九年丙戌年五月富士一郎謹書時十七年、授与之相州沼代村片木叢蔵先達結社林林蔵殿へ者也」とある。富士玉産の息子一郎が書いたものである。片木叢次郎の墓が沼代福泉寺にあり權訓導片木叢次郎明治二十六年三月九日世寿六十三歳と刻まれている。小田原における東講は曾我谷津、上曾我、田島、千代、永塚、中里、下大井、飯泉地域に分布している。(付図1参照)

(お知らせ) ページ数の関係か
ら、「時宗の開祖一遍とその開祖
他阿真教」「露國・日露の役辱
虜のこと」の二編は次号に回し
ます。

(続)

日ニ及ブ這次大東亜戦々捷ヲ記念シ
之ヲ再興シテ以テ祖先ノ偉業ヲ結
グ、昭和十七年五月一日 曽孫 椎
野政雄建立」とある。

沼代より明沢へ下る途中にある沼
代天王さんには浅間塔、登巒五十度
碑、日露戰捷記念碑、堅牢地神碑が
ある。浅間塔は慶応元年再建のもの
で碑文は書体より見て富士玉産書で
ある。沼代、明沢講中が建立したもの
ので二十二名の名が刻まれている。

登巒五十度碑には中道七回、内八湖
参回外八湖修業權訓導片木叢次郎と
刻まれており、明治二十四年建立の
ものである。日露戰捷記念碑は明治
三十九年に丸岩講少講義林林蔵が建
立したものである。講社のお伝えによ
れば「明治十九年丙戌年五月富士一郎
謹書時十七年、授与之相州沼代村片
木叢蔵先達結社林林蔵殿へ者也」と
ある。富士玉産の息子一郎が書いた
ものである。片木叢次郎の墓が沼代
福泉寺にあり權訓導片木叢次郎明治
二十六年三月九日世寿六十三歳と刻
まれている。小田原における東講は曾我
谷津、上曾我、田島、千代、永塚、
中里、下大井、飯泉地域に分布して
いる。(付図1参照)

東講の開祖は身禄派の眞月不昧良光(南沢正丘衛)で、その門人には山本善光(善右衛門・天保十四年没)がいる。善光は大阪屋甚助と入谷東講を起こし、文政十一年台東区下谷坂本小野照崎神社境内に富士塚を築造した。同所に建てられている入谷東講元講碑(大正十四年)には講元鴨田甚助、相談役鈴木又八以下四名、先達小野亮廣、世話人五十嵐久太郎以下十二名の名が刻まれており、当時の組織を知ることができる。また、同講の東同行と書かれた碑には下谷、神田、本所、深川、浅草、三河島、相州小田原など十九の地名が刻まれている。小田原における東講は曾我谷津、上曾我、田島、千代、永塚、中里、下大井、飯泉地域に分布している。(付図1参照)

安政年間に存在し、特に明治期には山北町岸の富士玉産の影響を受け昭和初期に消滅した。

『新編相模國風土記稿を糾す』

足柄下郡中里村の起り

石井啓文

先に、『小田原史談』第一七一号

(平成九年十月)で「年貢割付状に

みる新屋村と中里村の合併」と題し

て、①風土記稿は、中里村は新屋村から

分村して成立したとしているが分

村はなかった。

②新屋村検地帳は二村を一村とし

て検地を実施している。

ことを筆者は明らかにしました。

③新屋・中里両村を一

村として検地をしたのか、解明でき

ないまゝ、新たな史料の発掘と研究

に期待するとしています。今回、こ

れらを解明する史料を見い出すこ

とができましたので、発表させてい

たります。

『新編相模國風土記稿』(以下「風土記稿」という)の、中里・新屋両村の起りと合併の経緯を、要約して再掲します。

一 元和三年検地は、慶長検地の誤り

當村古くは新屋村と唱ふ。村民次郎左衛門の祖善左衛門と云う者、天正中より元和年間に至るまで、高三百石余を新墾し、此賞として次郎左衛門が宅地九畝十八歩を免除せられし

中里村

風土記稿は、新屋村の検地を元和三年としていますが、小田原領の検地は、天正・慶長・寛永・万治の四年に行われており、次の理由から元和三年検地に疑問が生じます。

忠隣失脚後で番城期と言われており、代官または城番が検地を実施しただろうか

が派遺した奉行の検地ならば、名主中右衛門の祖三郎左衛門、慶長中より元和の頃に至って、高二百石余を開墾せしかば、村名を新屋と唱へ、元和三年検地ありて貢数を定む。

此時の水帳に高五百九十石七斗七升九合、新屋村と見ゆ。然るに寛永十八年検地ありて、高百石余を裂いて別村とし、中里村と唱ふ。此時の水帳に高四百九十三石六斗六合新屋村、高百一石一升五合中里村と見ゆ。故に正保の改に新屋・中里両村を併載す。其後、慶安一年稻葉美濃守正則領主たりし頃、故ありて新屋村を廃して、中里村に併入し一村となせしと云。されば元禄の改には新屋の村名を載せず、今は高六百四十九石余に増加す。

以上の三点に、元和三年検地の根拠とされる検地帳が、巳ノ三月一日付と元和三年巳月二十八日付で二冊、原家(元中里村名主家)に現存し

ますが、いづれも表紙が欠落しており村名及び検地実施日は確定できません。小字名が記されていることから中里村(新屋村?)かの検地帳と判斷できますが、二冊の日付が異なつており、慶長十六・七年(二六・二七)年としているから、と記しています。

『風土記稿』は、天保十二年(二四)に同五年(二八)頃の地誌書上帳を元に幕府が編纂したものです。同書の記述から、その著者は原家に残る表紙(検地実施年月を記載)のない「検地帳」を見て、最終頁に書かれている作成年月日(実施日かも知れないが)により、この年に検地が行なわれたとしたのではないだろうか。

イ項元和三年の中里村は、これまで多くの郷土史では幕府領とされ

ていますが、「中里村鑑」に小田原城代近藤平右衛門秀用(上野国青柳藩も同様)とあり、青柳藩領ということがなります。従つて、元和三年に実施したことになりますが、こうした記述は全くありません。

口項地積の単位は、太閤検地で全

国的に町反畠歩制に統一されます

が、小田原に入府した大久保氏は、

慶長検地までは北条氏の古制である

大半小歩制を採用しています。

内田哲夫氏は、小田原領の村では

少なくとも元和三年という時点では、大半小歩制は使用していない、

と言われば、「原家検地帳」が大半小歩

制であることから、中里村元和三年

検地についても疑惑を呈しながらも

『神奈川県史所在目録』で、元和三

年としているから、と記しています。

『小田原藩の研究』。

これを解決するためには、ハ項の検地人を知ることです。彼らが大久保忠隣の家臣ならば慶長検地と言えるからです。そして、『寛永諸家系図傳』・『寛政重修諸家譜』・『旗本人名辞典』・『姓氏家系大辞典』等のいづれにも彼らの名前はありません。

ところが、『三河物語』(大久保彦左衛門忠教著)に、

川家康が今川氏真の籠る掛川城

永禄十二年(二五六)正月、徳

を攻めた時、伊藤武兵衛を椋原次右衛門尉が討取る。大屋七郎を大久保治右衛門忠佐が討取る。小坂新助は、城正面の土塁まで押入つて敵を討取り引上げた。

と、この戦いの戦功者の一人に小坂新助を挙げています。

更に『徳川実記』の慶長十九年大久保忠隣の失脚時と大坂冬の陣・夏の陣の項に、次のように記されています。

※台徳院殿御實紀卷廿五 慶長十九年正月

○十九日執政相模國小田原城主大久保忠隣が居城を収公せらる。

○廿五日小田原の本丸にて

御所御對面ありて。：（中略）
：當城の外郭石壘を破却せしむ。

○廿七日是まで大久保相模守忠隣に預られし小坂新助某。米倉丹後守信繼。曲淵庄左衛門正吉。其外武川衆召出さる。

※台徳院殿御實紀卷廿九 慶長十九年十月

○廿三日鎌奉行は小林勝之助正次。：（中略）：小坂新助勝吉。

※台徳院殿御實紀卷廿五 元和元年四月

○十日鎌奉行近藤平右衛門秀用。小坂新助某。：（後略）：

以上の記述から、小坂新助は家康の臣だつたが何らかの理由で小田原藩に預けられ、忠隣失脚と共に幕府に召出され、大坂冬・夏の陣に二代將軍秀忠公の鑓奉行を務めていたことが知れます。忠隣失脚から僅か八日後に小坂新助以下を召出していることに、忠隣改易と大坂攻めが表裏一体であることを窺わせますが、小坂新助が慶長十九年一月末に小田原藩を去つたことが判明し、中里村検地は、忠隣失脚前の慶長十八年以前に実施されていたことになります。そして、寛政重修諸家譜等に見られない、大草庄左（右）衛門と形（刑）部（七）右衛門は、忠隣の家臣と思われます。（）内は、検地帳の解読文字です。

二 小坂新助は、帰農を決意したのか

○廿五日小田原の本丸にて

兩

：當城の外郭石壘を破却せしむ。

○廿七日是まで大久保相模守忠

隣に預られし小坂新助某。米倉

丹後守信繼。曲淵庄左衛門正吉。

其外武川衆召出さる。

慶長検地の写しと判明する二冊の検

地帳の巳ノ三月一日付をA帳とし、

元和三年巳四月廿八日付をB帳とす

ると、A帳の最終頁にある検地役人

の外に、A・B両帳の本文中にも小

坂新助と七右衛門の名があります。

二人の名前はB帳に多く見え、

次。：（中略）：小坂新助勝吉。

○廿三日鎌奉行は小林勝之助正

次。：（中略）：小坂新助勝吉。

○十日鎌奉行近藤平右衛門秀用。小坂新助某。：（後略）：

式歩又四郎 小坂江地かえニ石

高引

ハ、中田壱反大卅式歩

此内

八十式歩新助入 くわいせん

ニ、下畠壱反小歩田ニ成

此内

大五歩新助入 与三郎

ホ、上田式反大四拾歩

此内大

九拾式歩石高引雅樂助 小坂江

地かえニ但七右衛門前ニ有

ヘ、（小計）中田三町三反式十三

步此内八十式歩小坂江□□

ト、（合計）下畠四町三反半式十

八歩此内大五歩小坂江

チ、（總石高）□以上五百九拾石

七斗七升九合 此内五斗九升五

合ハ小坂□□□出共ニ

リ、中田一反五拾五歩（A帳）

是ハ地頭之七江出候地 善左衛

門

（B帳）是ハ地頭之帳より出候地

善左衛門

と、新助が中田一筆を所持すると共に、

ヌ、中田三反大六拾歩 新助

地かえニ但七右衛門前ニ有

ヘ、（小計）中田三町三反式十三

步此内八十式歩小坂江□□

ト、（合計）下畠四町三反半式十

八歩此内大五歩小坂江

チ、（總石高）□以上五百九拾石

七斗七升九合 此内五斗九升五

合ハ小坂□□□出共ニ

リ、中田一反五拾五歩（A帳）

是ハ地頭之七江出候地 善左衛

門

（B帳）是ハ地頭之帳より出候地

善左衛門

が、記されています。

以上の考察から、小坂新助が地頭

が、A帳に記されています。A帳は

このハ・ニ・リ三筆のみで集計部分

にはありませんので、B帳に着目し

ます。

イ・ロ・ホは「小坂江地かえ石高

引」と記されているため、この三筆

を除くと中田及び下畠の集計（ヘ

ト）は、ハ・ニの小坂分ですから、

これに反当たり中田一石三斗・下畠三

斗五升の石盛を乗ずると、

時代は少し下るが同じ小田原領の

御殿場地方で、稻葉氏の奉行として

しばしば領内の年貢割付に加判して

いる奥住新左衛門が開いたという龜

新田があります。奥住氏はその後同

村に屋敷を有しています。内田哲夫

氏は、稻葉氏の家臣に對する知行制

度は、一部に知行地を給する地方知

行制を残していたが、全体的には蔵米を藩が給する蔵米知行制をとつてゐた。そして、奥住新左衛門は牢人の身で新田開発に加わり、自己の開発地を所持したまゝ、つまり開発領主としての権利を公認された上で稻葉氏に仕官できることは例外中の例外である(『小田原藩の研究』)。

と、言われています。

お預けの身である小坂新助は、奥住氏とは逆の立場であり、忠隣了解の基に新田開発に加わり、開拓地を知行地として得たのか、それとも中里村に帰農することを考えていたのだろうか。

いずれにしても、その後の寛永検地帳には新助の名は見られず、忠隣失脚により、これらを断念させられたことになります。

三 はじめに中里村ありき

中里村と新屋村の成立を窺わせる、「万書留」(原家文書)と、「原家由緒書上」(同文書)があります。

「万書留」は、数件の文書を綴つたものです。が、「寛文拾式年(二至)子六月、諸御役所御尋ニ付書上」の中で、中里村の経緯を「北条氏没落後、天正十八年(二五〇)、大久保七郎左衛門様相続」から筆を起しており、後北条氏の頃に中里村が成立していたことを窺わせます。この記述は、寛文十二年(二五二)の中里村鑑でも同様に記しています。そして、公儀か

ら正保絵図に中里村と新屋村の二村があるが、その後は中里村一村となつてゐる理由を尋ねられ、「五三年前(逆算すると元禄十五年(二五三)から)の慶安二丑年(二五九)、稻葉美濃守様御代に一村とした」とも明記しています。

宝暦十三年(二七三)未八月に書かれた「原家由緒書上」には、「中里村善左衛門天正年中に高三百石芝田開發して新屋村と称し、其節中里村は高百石の別村に御座候、其後貳百石を開発、天正十八年中里村名主門左衛門屋敷出火仕御水帳并諸帳面一切焼失仕候、妻子共出奔、新屋村名主兼役被仰付」と、あります。

こうした記述から、「風土記稿」は新屋村から中里が分村したとあります。が、始めて百石余の中里村があり、そこから三百石の新屋村を新田開発したことなどがわかります。その後、更に二百石を開発と二回に分けて記していることから、この間に天正検地も行われたことを窺わせ、中里村と新屋村が最初から別村であることも特記しています。

そして、合併の理由を、「七九年前(元和九年(二六三)か)、中里村名主甚左衛門出火家財焼失行方不知のため、新屋村名主源右衛門が兼帶しているから」としています。また、万

百石余で村の形態が整います。天正より、中里村については次のように改訂されねばなりません。

四 新編相模國風土記稿を糾す

冒頭に示した「風土記稿」の記述は、「日本地名大辞典」(角川書店刊)及び日本歴史地名大系(平凡社刊)に記されていることから、多くの郷土史や案内版に引用され、定説化しつつあります。しかし、この「風土記稿」も今日私たちが史料を元に調査しているように、天保時代に見られた史料で書かれています。従つて、間違いがあつても不思議はないのです。

歴史は、その時代の見方・考え方による解釈は異なり、新たな史料の発見で訂正されねばならないことは当然生じてきます。これまでの考察により、中里村については次のように改訂されねばなりません。

寛永十八年(二五九)稲葉氏の検地を受けますが、この時も名主は兼任しているため、慶長同様に新屋村一村として実施されます。新屋村名主源右衛門は、先代善左衛門の功を認められ、江戸時代を通して屋敷九畝一八歩を賜ります。

慶安二年(二五九)、時の城主稻葉正則は西筋にも(飯田)新屋村があることから中里・新屋両村を一村とし、中里村とするよう命じます。その後、万治二年(二五九)の検地は中里村です。

中里村　中里の地は奈良朝時代に百石余で村の形態が整います。天正

五年(二五九)武田氏の元を離れ

ます。

中里村　条氏の頃、中里村は村高百石余で村の形態が整います。天正

語」と「徳川家譜」に見い出したこ

とで、中里村の検地を元和でなく慶長と新説を述べてみました。調査が進む内に私は、「風土記稿」の著者が当時名主をしていた原家に残る一部の史料を見て書かれたように思えてきました。今から一五七年前の天保十一年(西暦1830年)に、原家に現存する表紙の欠落した検地帳を見ていたことを考へると何とも驚くべきことの不可思議さを覚えます。

また、「徳川実記」で小坂新助は慶長十九年一月に小田原を去り、大坂の陣に参戦しますが、その後彼がどのように過ごしたか。彼と共に忠隣に預けられ召出された米倉氏と曲淵氏は、武川衆同様武田氏の家臣で、大坂陣後、甲州に領地を与えられ徳川氏に仕えています。小坂姓は旗本人名辞典に数家見られ、新助はその内のどれかの先祖と思われますが確認できません。

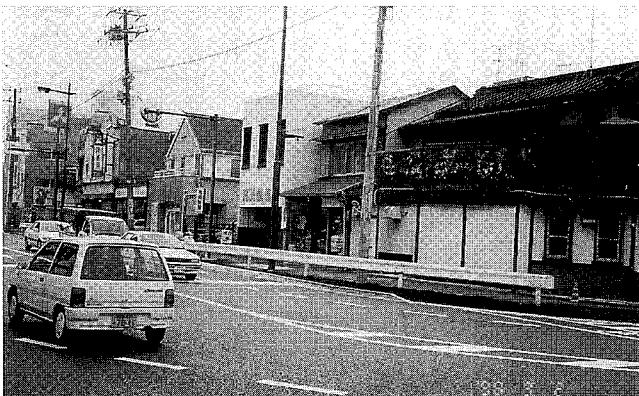
これまでの郷土史では、忠隣改易後は阿部藩主時代(元和五十九年)を除いて城番時代とされていますが、城番は慶長十九年と寛永元年の二年だけで、秀用は通算十二年小田原城代を務めています。そして、前期城代時代は中里村外十九カ村(現在判明する村数)が、青柳藩領であつたと考えられます(詳細は拙著『古文書による中里村史』参照)。大坂夏の陣では近藤秀用が小坂新助同様槍奉行を務めています。忠隣改易から稻葉氏入府まで、青柳藩領を含めて近藤秀用と小坂新助について興味が尽きませ

ん。是非、皆様のご意見をお聞かせ下さい。

なお、「原家文書」の「万書留」と「原家由緒書上」に中里村の起りが記されていることは、同文書を解説された長野ふみ江様のご教示があつたことをご報告し御礼申し上げます。

写真今昔

家並みは、国道一号沿いの小田原市本町一丁目十番、昔の小田原町幸一、二丁目に当たる。東京電力小田原営業所の前を南に下り、道路が西に大きくカーブした右手である。下の写真は昭和初期のものである。



道路が現在のように広がったのは大正十二年(西暦1923年)の関東大地震以後のことである。それまでの道幅は今の約二分の一程度であった。

手前に砂利の現れているのをみると未だ道路は舗装されていない。

尾崎正氏の話によると、舗装されるようになったのは、昭和十年(西暦1935年)頃からで、走る一台の似通つた乗合自動車は富士屋自動車のものだと云われる。

眞ん中あたりに見える自転車に乗る人の服装は洋服。当時、自転車が

漸く普及し始めた頃である。一方歩道を歩く人は和服姿である。二台の乗合自動車の後ろを走る車の上部に見える圓いは、駿河銀行小田原支店(のち小田原幸町支店と改称)あたりと思われる。ところが、この支店の建物は、「駿河銀行七十年史」によると大震災の翌年の大正十三年七月に建築とある。

はたして、現在残る鉄筋コンクリートの建物が、震災後九ヶ月ほどで完成したものか? 関東大地震後すぐ建築に着手したものとは思えない。疑問が残る点だ。片岡永左衛門「震

災日記」の大正十三年六月十九日の頃には、「銀行預金の引き出しも昨年末にて一段落となりしに、追々半永久の建築も着手の為期限到来の分は多くは引き出しとなり……」とある。片岡永左衛門は関東銀行小田原支店長で、云うなれば商売仇であるが、堂々たる鉄筋コンクリートの建物の完成を無視した人柄とも思われぬ。検討を要す点である。

写真右から十五屋、大山屋、楽天堂、高橋旅館、風月堂、洋月(現浜ずし)、相沢時計店等が続く。

相模権守 源重之

日下部 庄一

浪の声に夢が覚める

歌指導でもあります。

恋しさはゆめにのみこそ
なぐさむれつらきは
なみのこゑにざりける

自分を翁と稱して、判者役
をつとめる重之公、前掲書
の四頁によりますと「晩年
は陸奥に子を同伴し」と、

この一首につきまして、
目加田さくを先生(梅光女學
院大學客員教授、福岡女子大
學名譽教授)著「源重之集全
积」(風間書房昭和六十三年九
月三〇日發行第一四三頁)か
ら引用させていただきま
す。

〔参考〕判定を「わろし」と
下し、模範歌をよんでもみ
せたもの。

と、記されております。

前掲書第一四二頁には、

〔通釈〕「浪の声に夢が覚
める」という題で、為清

と致親とに歌を詠ませ
て、翁(私)は判定をす
る。

〔参考〕れつきとした詩題
の歌題を出し、二子に
歌を詠ませ、判者の役を
つとめる重之。

心楽しい芸の遊びの一時
である。それは同時に作
りますと、「尊卑分脈

重之歿年は、前掲書の四
章によりますと、「尊卑分脈

に長保二年於奥州卒」とあ
る、と記されております。

長保二年(1000)から一
千年後の平成十二年(2000)
は、没後一千年を迎えるこ
とになります。

それまでの間に、私は、
この歌「浪の声に覚めた」

夢の中の歌を、自分勝手に
記されており、このことは、
相模にも、陸奥と同じよう

なことが予測されます。

特に、壯年期の重之には、
相模はかつての行政地であ
りましたし、國務を執った
約十年間から生まれた関係
者も多かつたでしようし。

中には、重之家にとつて
は、深窓の縁者と思われる
存在もあったと考へられま
す。

〔語釈〕宮達一複数ではな
い。語感を柔らかにする
表現。さる宮 さる皇女

の意。心中重井筒にも「こ
れ女房共……」と自分の

妻に向って言う。日本語

の表現法の一。

〔参考〕わかんどうり 三

世、微官の重之では、皇
女は高嶺の花。皇女も重

之との関係を恥ぢて口が
ためしたものであろう。

清和曾孫重之は極官が從
五位下相模権守にすぎな
かった。

おもひでのかなしきも
のは人しれぬ心のうち
のわかれなりけり

〔通釈〕ある人(私)が、
さる皇女の方に、まるで
夢のような逢瀬で、その
劇中劇に匹敵する歌を思
ひ込んで自分勝手に目加田先
生の文章から引用させてい
ただきました。

私の、脳裏にのみ存在し
た幻覚から、映像を求めて
ゆけるかなと思いまして、
「恋しさはゆめにのみ」の
劇中劇に匹敵する歌を思
ひ込んで自分勝手に目加田先
生の文章から引用させてい
ただきました。

〔通釈〕親の喪に服してお
ります(と)夢にまざまざ
と親が現れます(ので)仏
前に鐘を叩いておがんで
おりますが、その都度、
夢になくなつた親が現わ
れます。私には鐘の声は
死出の山をこえて親にあ
いにゆく道の道案内とお
もえましたよ。

〔語釈〕おやのいみー父親
重之の忌か。この作は長
保二年か三年の作とな
る。

その方が亡くなつてしま
われたので、思ひ出して、切なく悲し
いものは、一人わが心に
秘めた胸の中での、あの
人との別れだつたよ。

さて、次に時代を「西暦
一千年前頃」源重之没年の頃
に移させていただきます。
目加田さくを先生著、前
掲書「重之子の僧の集」第
三二五頁から引用させてい
ただきます。

文と引用文とを組立てさせ
ていただき、それが私も、
出来得る方法として、よい
方法であると考えさせてい
ただきました。

次に、重之の没年頃をふりかえりながら、少々の遺品類に話しかれさせていただきます。

小田原市章はご存知の梅の花形です。梅の花模様は至るところで見受けられます。重之の所持品と伝える物の中にも梅の花に酷似した模様の金具を使用しているものを散見いたします。

又、伝重宝と称する品に謁しますと、入れ物の留め金に七星模様を刻してます。

特に、古代に梅の花形となりますが、小田原の梅木の糸を、たぐり寄せたくなる不思議な気持ちになります。

「十世紀頃までは、花といえど梅の花を指す時代が続き、梅は貴族の庭に植えられて、愛好されています」

(世界大百科事典)。

〔梅木烟〕、石垣山の頂上北面に「梅ケ窪」と記されて、拝讀すると、梅木林があります。

〔宮ノ沢〕は、早川惟喬伝説の紀伊神社に近い位置と思えます。

前記の村誌第一六頁に記

されている「早川真福寺開山、万寿元年(1004)」の平安時代に「梅木烟」地名起源を求めることが出来れば、平安梅へ一步踏みこむことになると考へられます。

〔通釈〕法螺貝の声を聞きまして

ああ、法螺貝の声がひびくよ、この山風に吹かれで谷々にひびき流れる法螺貝の声がしなかつたら、どうして、この山中で「お起き、もう朝だよ」と誰が教えてくれましょうか。

と、記されております。

歌詠地は不明ですが箱根

山とさせていただきます。更に、同じ作者の次の歌を、相模海岸での歌詠として上掲書第三一〇頁から引

かひのことをききはべりて
いざり火をみはべりて

なみよりほのかにみゆるいざり火にこがれやすらんあまのつりぶね

〔通釈〕漁火をみまして

(詠んだ歌)

この歌は、平安梅の収穫に拡大され、P.R.に利用されたらよいなど思いました。

私達の郷土で、「一千年前」、梅干しを生産し得ることもあつた、と知らせて下さい。

小田原梅五百年の歴史から更に、一千年の歴史へと押し上げてくださる思いであります。

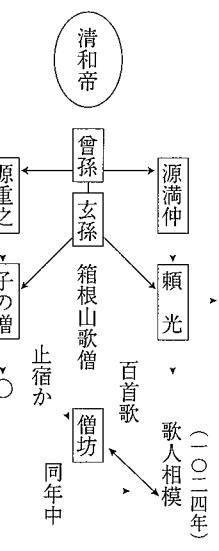
相模での重之歌枕「こゆるぎのいそのわかめ……」から、小田原産わかめに「こゆるぎ わかめ」などのブランドが生まれたら、うれしいですね。

用させていただきます。
梅の花も散つてしまつて寂しい我が家に、しんきくさい思いをしてくらして下さる人もありましたよ。梅の実のおかげですね。〔語釈〕かへりごとに一恐らく梅の実少々に、この歌をそえたものである

引き続いて前掲書第三三五頁より梅の歌を引用させていただきます。

小田原梅五百年の歴史から更に、一千年の歴史へと押し上げてくださる思いであります。

相模での重之歌枕「こゆるぎのいそのわかめ……」から、小田原産わかめに「こゆるぎ わかめ」などのブランドが生まれたら、うれしいですね。



五百年前から、小田原梅は伝わっておりますが、私は、次の文を述べさせていただきます。

故青木友吉先生著、「早川村誌」第一一八頁の「早川小字地名図」によりますと、「宮ノ沢」地名に隣接して

やどのむめすこしこひたるひとのかへりごとにむめの花ちりにしやどぬる人もありけり

〔通釈〕我家の梅の実を、とねだつた人への返歌に

今後も、源重之公の事跡に、私は関心を持ち続けて行きたいと思っています。

酒匂川の川越 (つづき)

勝保淳一郎

前回(第一七二号)に続いて「歩行わたり」について記してみましょう。

橋がなければ、何らかの方法で渡らなければなりません。その様子がわかるの点が残っています。どこかでごらんになつた方も多いと思いますが、れん台に乗つたり、かたぐるまになつたりして渡っている旅人が見られます。何らかのかたちで人の世話になつて渡るのです。ごく一部を除いて、勝手に自分一人で

渡つてはいけなかつたのです。しかも有料でした。
まず、朝六時に、役人が川へ出て、今日の流れ、深さ等を調べます。雨が多く降ると危険になります。「深さ四尺五寸に至れば、三合水と云、往来を留む」(新編相模國風土記稿)とあります。これを「川留」といいます。旅人は、足どめをくつてしまします。何日も渡れない場合は、道中の旅費もかかってしまいへんで

「一水マタ切時之事
馬壹疋荷物共ニ川越賃
壱人ニ拾文、手引壱人
ニ川越賃同断、商人ニ:
一水アバラ下より横帶切
之時事
馬壹疋荷物共ニ川越賃
壱人ニ付三拾□文…」

「一水マタ切時之事
馬壹疋荷物共ニ川越賃
壱人ニ拾文、手引壱人
ニ川越賃同断、商人ニ:
一水アバラ下より横帶切
之時事
馬壹疋荷物共ニ川越賃
壱人ニ付三拾□文…」

「一水乳切時之事
馬壹疋荷物共ニ川越賃
壱人ニ五拾文
(東町) 和田登氏蔵
(?) 網一色村明細帳よ
り
寛文十二年及び元禄三年
一 商人荷物上同断壱人
乘一舟壹艘借切五百五
拾文
賃之事
水主拾三人

「一水乳切より上之時舟越
賃之事
水主拾三人

一 荷物壹疋百拾弐文
一 乗物壹挺ニ式百弐拾
四文…」

との記録があります。一般には、船越はなかつたといわれていますが、これにより、船を使ったこともわか

と、歩行わたりも再開されます。これを「川明」といいます。

まず旅人は、川会所とい

う所へ寄つて、川札を買

い

ます。今のキップにあたる

ようなものです。はじめの

頃は、「相対賃錢」という形

で、旅人と人足との話し合

いで値段を決めて渡つてい

たのですが、おどされて高

い金額を取られたりするよ

うなトラブルがたびたび

あつたようで、正徳元年(一

七二)「御定賃錢」という制

度となり、値段が決められ

たのです。水の深さによつ

て値段も違います。

川札を手にした旅人は、渡し場へ行き、こ

れを人足に渡して、先

の文書にあるように馬

に乗つたり、手を引い

てもらいながら渡ります。

商人は少し高い値

段です。水マタの所で

十七文になつてます。

また、この文書には

この文書から、水の深さの違いにより、拾文、三拾□文、五拾文の三段階に分けられていましたことがわかります。現在の値段に換算してみると、(一文16円とした例がありますの

で) 拾文が16円、三拾

二文として、512円、五

十文が、800円ほどにな

ります。これは、人足

一人の値段ですから、

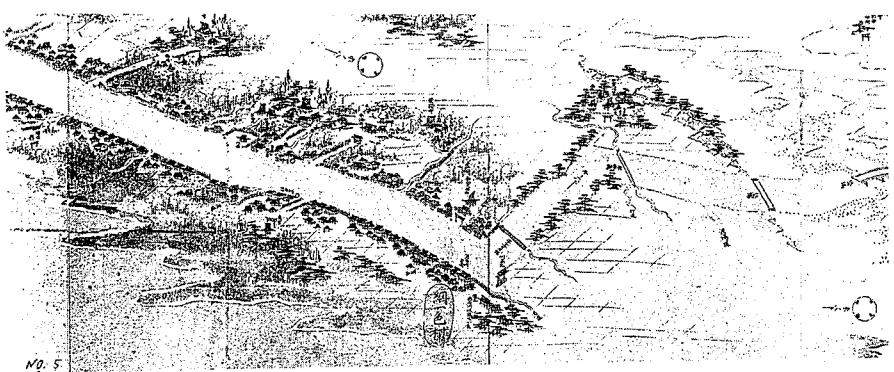
れん台に乗りますと数

倍になるわけです。ば

かにならない出費とな

ります。

「東海道分間延絵図」より



ります。これらについては今後追求していかなければならぬ問題だと思います。

船に関連して「船橋」のこと記しましょう。

何隻かの舟をならべ、そ

の上に木材などを敷いて、橋を造つたものです。馬入

川の絵がありますので、だ

いたいどんなものかわかる

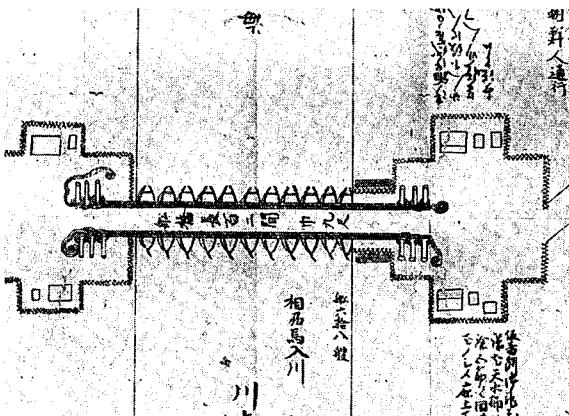
と思います。

この橋は、朝鮮使節など異国人使節が江戸参府するとき、特別に架橋したもの

です。

この橋の工事のために、遠く西伊豆地方の村々まで

かり出されています。



馬入川の船橋

またこの工事はたいへん

だつたようだ。

「明暦元年十一月 酒匂川

船橋架設工事の犠牲者など

にコメを下付する」(『永代

日記』『小田原市史』近世II)

の記録がある。よう、犠牲

者もでています。

このように、旅人も苦労

しましたが、歩行の世話に

あたる地元の人々の負担も

相当なものでした。毎日、一

〇〇~二〇人余り交代で、川

へ出て仕事をしたり、仮橋

船橋の工事にも出たりと多

少の賃金は得ていても、負

担はたいへんなものだった

と思います。

この橋の工事のために、

遠く西伊豆地方の村々まで

かり出されています。

やがて、江戸時代も終り明治に入ると、「歩行」もす

ぐ廃止され、「渡船制」がし

かれ、一人銭七二文で渡つ

ていたという記録がありま

すが、これも数年で廃止さ

れ、三つの仮橋がつくられ、五厘で渡れるようになります。

明治十五年二月には、立派な一つの木橋の完成をみ

ます。まもなくその上を、

馬車鉄道が通り、明治三十

三年三月からは、路面電車

が運転されます。それも、

大正九年十月で廃止。

大正十二年には、鉄筋コ

ンクリートの橋ができる

りましたが、わずか二カ月

後の関東大震災で落橋して

します。

その後、改修され、昭和

に入り、終戦後、台風によ

る大雨で上流から流れた

ジャリ船が橋にぶつかり、

傷んだこともありました。

長い間、使用されました。

昭和四十七年七月の集中豪雨により、橋が沈下し交

通止めになってしまったこ

とは、みなさんが存知だと

思います。幸い西湘大橋が

なんでもなかつたので、通

行にはそんなに問題になら

なかつたかと思います。

何かの形で、整備できな

いものでしようか。

このように、幾多の変を

経てきた酒匂川の川越です

が、車ではあつという間に

過ぎてしまうので、先人達

の苦労を忘れてしまいます。

最近、東海道ルネッサンス運動などにより、歩く人

もふえていることは、歴史

を知る上でよいことです。

ただ当時の様子を知る資

料等がほとんどないのが残念です。

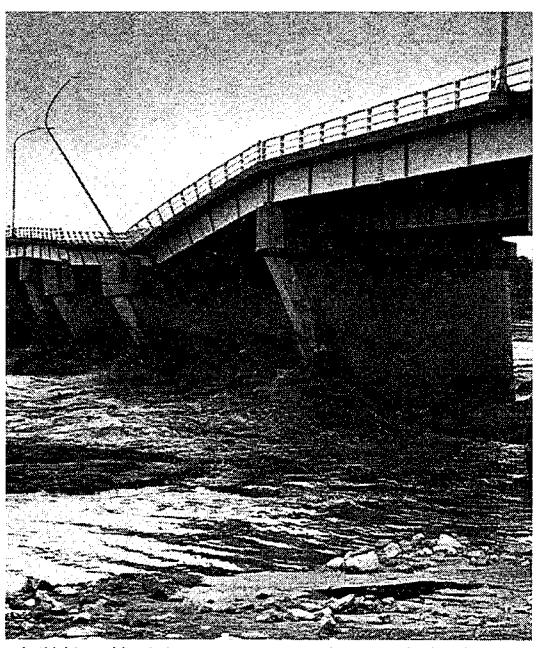
【かながわの橋】
関野昌丈著

【相州酒匂川徒渉制の展開】
宇佐美ミサ子著
中野敬次郎著

【小田原市史料】
小田原市立図書館蔵

【酒匂川日記】
酒匂中学校

【参考資料】
西湘リビング新聞社
『西相模の史談を探る』



小学校の教科書にものった酒匂川の水害 (1972)

江戸・東京に小田原を探る!

城と緑を考える会バスツアー 随行記

小野意雄
おの もとお

三庭園の概説

回遊式庭園の構成

回遊式庭園の特色

室町庭園と江戸庭園

のびやかさ・ひろがり

宮廷庭園と大名庭園

旧芝離宮庭園『樂寿園』

1 下屋敷の領

(以上本号)

「江戸・東京に小田原をさぐる」：この日の三庭園めぐりだけでは全くせない、興味深い大テーマであり、特に、旧芝離宮庭園（旧称『樂寿園』）は、小田原城跡の整備・復元計画の上からも、小田原人が作庭した史跡として、参考にしたい趣旨がよく判つた。また、樂寿園近くの小田原町ほか江戸湾岸の町々に、小田原が深く関わっていることにも、留意したいと、思つた。

回遊式庭園の構成

回遊式庭園では、園地中央に大きな池泉、その中央に中島。

この中島は、蓬莱島といわれ、近接して鶴島・

亀島が配される。蓬莱島には、西岸

からは平橋が、東岸からは反橋が架

けられ、渡れるようになつていて。

舟遊びもできる仕組み。

池泉のまわりには、芝園・築山・

苑路が配され、この静態的・立体的

空間を、苑路で普通は、右・時計廻

りに回遊する。苑路には、滝・溪流

と四季を彩る花木が、動への誘因・

そして、日線や思念を、静から動へ

変換する環境要因として作動する。

現地での、見どころとして、特に

強調されたのが、旧芝離宮庭園の石

組の素晴らしい管理だといふことだ。

ちなみに、後楽園は、国

指定の特別史跡と特別名勝の二重指

標記の魅力的なキヤッチフレーズ

で見学会参加を呼びかけられた。旧

芝離宮（JR浜松町駅の東隣り）での現

地参加者七名をふくめ四十二名の申

込みの大反響。実参加三十九名。五

月二十四日（日）朝七時三十分、定

時出発。小雨も予想された天気だつたが、傘は、最後の後楽園での一寸

だけの好天氣。帰途は雨の中…。

定。六義園は、特別名勝指定。旧芝離宮庭園は、無指定であるとのこと（昭和五十三年六月二十五日付けで、「名勝」に指定されているので、ここに訂正しておきたい）。

三庭園、いずれも江戸時代前半期に造園された大名庭園。大名庭園に共通する大きな特徴として、回遊式

にされたかは、日本庭園作庭には、「しきる・さえざる・おおう」という三つの手法があることを念頭に觀察するとよいということだった。

回遊式庭園の特色

回遊式築山池泉庭園から、特色と

して、つぎの四つのことを感じた。

この隨行記を記すにあたつて、白幡

洋三郎著『大名庭園 江戸の饗宴』を

読んだ。白幡氏の所説は、まさに、

この四点にあつた。用語・表現等、

氏に負うところとなつた。

① 政事と遊事の秘園

② 山海の佳景の採り入れ

③ 茶事の「座位」儀礼の場・茶室

④ 社交・饗宴の迎賓館

回遊は、芝園と築山と池泉を結ぶ

苑路と橋の、人々の歩行と視線の交

錯で行われる。緑の芝生と澄んだ池

泉の上には青い空が広がつていて。

回遊式池泉庭園が、心のひろがりを

生んでいることが、ます感じられた。

築山の樹叢と溪流・滝・枯滝。人

びとの心は、ざざめきのなかで、さ

わやかに洗われる。蓬莱島や竹生島

とその石組。そこに配された趣向に。

人々の心は快活な驚きに打ち震え、

かつ留まる。中国趣味の、あるいは



『旧芝離宮恩賜公園』のパンフレットより

禅宗の影響の強い鎌倉・室町時代の庭園では、一つ一つの造景、意匠がきびしく見つめられ、そして一つが強いて自己主張をしようとしているようだし、主な鑑賞・観照対象とされたと思う。江戸期庭園では、一つ一つの造形物・意匠は、話題を提供する仕掛けで、庭園全体の内の点景・添景のようである。前者は、どちらかといえば座つての鑑賞で、点景に思念を凝縮させ、

日本各地の景勝の縮景に(後楽園や楽寿園)、あるいはまた、和歌の世界(六義園)に遊ぶ。枯滝や枯山水ではない清冽な水の使い方の六義園や後樂園。一歩進み、潮入りの旧芝離宮は、心の動きと自然の営み・息吹きの脈動とハーモニーする素敵な発明と思つた。

室町庭園と江戸庭園

瞑想に心を誘う仕掛けといえる。後者は、回遊によつて憶いを飛躍させ、また、借景に目線をおよばせ、ひろがりを興させる。思念世界での静と動のダイナミズムは、趣味・社交・行動世界での静と動のダイナミズムへと変化・進展させられる。なんといつても、江戸期庭園は、歩くことを、身体の動きを求めて、同時に精神にも動的な刺激を誘発する。

のびやかさ・ひろがり

三庭園いづれにも「のびやかさ」があつた。そのなかで、後楽園には和漢混交体様態の厳格さが、六義園には和歌様態の「おだやかさ」が感じられた。しかし、なんといつても、「のびやかなひろがり」を感じたのは、旧芝離宮庭園だった。

今日、後楽園も六義園も、鬱蒼たる緑の大樹に覆われてしまつている。当初、指図されていてであろう木々の大きさ、繁茂の程度を超逸したものに、なつてはいまいか。東京という大都会に、かけがえのない緑の森を供給しているプラス効果はあるとしても、これら庭園に意図された明るさ、柔らかさの印象が弱くなつてしまつている。

旧芝離宮庭園は、海浜に立地していること、築山も池を掘上げた土を盛つて、その土量に見合つた程度の丘にしかならないことが、つまり、かえつて、広びろとした平坦さが、「のびやかなひろがり」を維持させ

ているのかもしれない。

多くの観光・庭園案内書や諸家の評論は、高層ビルの谷間のうらぶれ

た姿と記述している。が、この庭園の備えている「のびやかなひろがり」

は、背景となつて、大都会に生

きる人びとのこころを、ゆっくりと

なごませてくれる強いキャラクター

であることを顯示して來ていると思

う。

一、『樂壽園記』

貞享三年三月 木下菊潭記

菊潭は、通称木下平三郎、儒者木の下順庵の第二子

昭和初年に庭園史家竜居松之助が久保家文書中より発見、紹介されたもののこと。

二、『大久保加賀守芝金杉上屋敷之図』

三、『大久保加賀守芝金杉上屋敷之絵図』

右の二点は、宮内庁書陵部の所蔵。

所有権移転に係わる届出書類と思われる。従来は文政年間の図と言われて来たらしい。小杉雄三氏は「安

永五年(二七〇)八月から天明二年(二七一)八月までの六年の間に描かれた図面」と考証している。わたしは、小田原藩の事情を勘案して、寛政五年(二七三)以降文政元年(二七八)

の間に描かれた図と推定したい。

1 下屋敷の拝領

大久保藩は、二代忠隣改易により

小田原を離れ、美濃加納、明石と転

封を重ね、五代忠朝の時は九州唐津

藩主であった。將軍家綱により、延

宝五年(二七七)老中職に登り、翌六

年二月下屋敷として芝の加藤屋敷の

東隣地を賜つた。この地は、明暦の頃の埋立地で、拝領時には葦が群生

し、鶴が飛来する江戸湾の波打ち際

だつた。

旧芝離宮庭園『樂壽園』

旧芝離宮庭園は、小田原藩主大久

保忠朝によつて造園された『樂壽園』

の姿を、所有者が変わつても、ほほ

そのまま引き継いでいると言われ、

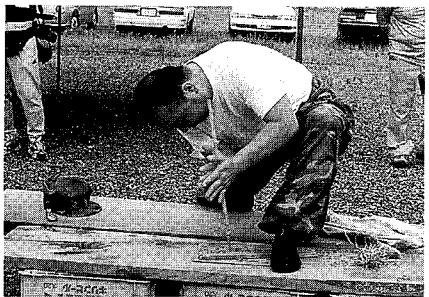
また、大名庭園のもつ、いろいろな特色・要素をほぼ全部備え、江戸庭園の典型といわれている。

なお、『樂壽園』原資料は、発掘調査資料を別とすれば、つぎの三点で

縄文時代を再現

土器の野焼き

田口誠一



①早朝七時半集合、テントを張り準備が始まった
②細い竹の先に紫陽花の枯枝をつけてきりもみ発火



③地面を十分に下焼。その上に順次作品を並べる
④苦心の作の数々が集まり野焼き待っている

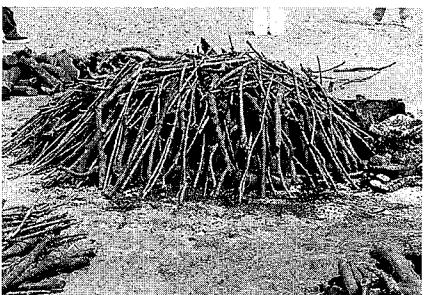


⑤作品と梅、みかんの枯枝と
この様な高尚な動機では
ありませんが、私は花工房「おむろ」にて車座寄合衆
に順次作品を並べる

「人はなぜ歴史に興味を持つんだろうか」とふと思ふことがあります。「好きだから好きなんだ。理屈などないよ」という面もあります。古代にロマンを駆せる、唯そのことが好きなだけというのが眞実かも知れません。それにしても、人類のルーツが一つで、みんな兄弟なんだと思うことで、訳の分からぬ争がバカバカしくなればこの上ない。

また文明と共にいつの間にかないがしろにされてきた自然を取り戻し、環境問題を解く鍵が得られればこれも意義深いこと。

この様な高尚な動機ではあります。しかし、私は花工房「おむろ」にて車座寄合衆に順次作品を並べる



⑦一時間くらいで、順次火が燃えつき、焼き上がる
主催の縄文土器作りに参加しました。講師は千葉県立房総の丘博物館研究員の大川一明さん。粘土も千葉産。七月五日、まる一日かけて壺もどきを作り、七月いっぱい、自然乾燥させ、八月並べた上に細めの枝をまんべんなく被せる



⑧こげ茶色が、冷めると鮮かな煉瓦色に焼き上がる

一日、小田原アリーナ前で野焼きをして完成。粘土をこねて焼く。唯それだけのことですが、博物館で見るご先祖様の作った土器が、

ちつとやそとの年期では作れないことを痛感しました。粘土の扱いは思いの外難しく、形成の途中で潰れてしまい、何度も作り直し、やつの思いで、稚拙な器を一つ仕上げた次第です。

汗だくになりながら、きりもみで縄文人と同様に火を起こす師の姿に感動する傍ら、ライター一つで瞬時に火が得られる現代生活に、

文明の歴史を実感しました。師の吹くゆるやかな横笛が縄文の空へ誘う。—縄文の音色がかもす野焼かな—



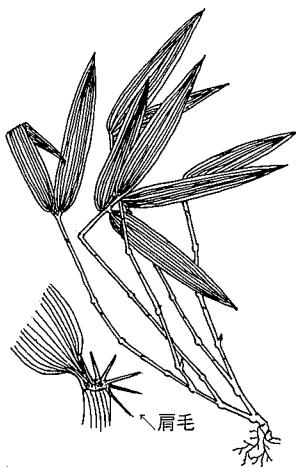
丹沢の植物

(37)

城川四郎

タンザワザサ (たけ科)

Sasa tanzawana



筆者原図

植物は、ほんらい花の構造や果実の構造を調べてその違いで分類する。花や果実は葉や茎に比べて環境の影響で変化することが少ないからである。ところが竹や笹の類は、めったに花を見せてくれないし、たまたま咲いた花を比べてもほとんど違ひがない。止むを得ず、竹や笹は茎や葉を詳細に調べてその違いによつて分類している。

さて、今回ご紹介するのは竹笹類の一種タンザワザサである。丹沢の最高峰蛭ヶ岳から丹沢山を経て塔の岳に至る丹沢主脈の尾根を歩くと、急峻な斜面に緑の絨毯を敷きつめたように背の低いササが生育している。このササがタンザワザサである。その特徴を挙げてみると、茎が低く、その下部で枝分かれをする。茎の節が丸く膨れている。茎に着いている竹の皮は毛がないの長さしかない。葉の付け根に肩毛という毛が放射状に開いて生えている。葉の裏には柔らかい毛が密に生えているからさわってみるとビロードのような感触がある。

わたしは、ミヤマクマザサに非常に近い別の種類であると考えている。タンザサは箱根にも多く分布するミヤマクマザサと同じ種類であるという。

わたしは、ミヤマクマザサに非常に近い別の種類であると考えている。タンザサは箱根ではタンザクマザサの群落を観察していることや箱根ではタンザワサ型のミヤマクマザサを見ていながらである。困ったことに、わたしの主張の根拠にしている丹沢のミヤマクマザサが、鹿に食べられて今はほとんど全滅寸前の状態になつていい。とにかく、丹沢の尾根に広がるあのササは、タンザワサの名で呼ぶのがふさわしい。

もし、丹沢を歩く機会に背の低いササで、葉の裏にビロードのような感触のあるものに出会つたら、それはきっとタンザワザサである。

透谷の書誌作成に打ち込む

鈴木一正さん

鈴木さんは、国文学研究資料館の整理閲覧部受入係長を勤める傍ら同人誌『時空』を発行されている。創刊号を発行されたときは、「これは『三号新聞四号雑誌』に終わるのではないか」と思っていたが、どうしてどうして、いきや、じうしてじうして、サは箱根にも多く分布するミヤマクマザサと同じ種類であるといふ。

わたしは、ミヤマクマザサに非常に近い別の種類であると考えている。タンザサは箱根ではタンザクマザサの群落を観察していることや箱根ではタンザワサ型のミヤマクマザサを見ていながらである。困ったことに、わたしの主張の根拠にしている丹沢のミヤマクマザサが、鹿に食べられて今はほとんど全滅寸前の状態になつていい。とにかく、丹沢の尾根に広がるあのササは、タンザワサの名で呼ぶのがふさわしい。

透谷研究の第一人者で書誌も作成している群馬県立女子大学長平岡敏夫氏は、「文献目録は、今では鈴木さんにお任せしている」とのこと。

透谷の魅力は、「まず文章が素晴らしい。文体が魅力で」あると云われる鈴木さん、透谷の資料を調査・収集しているうち、かなりのコレクションになり、自室で「もうと集めて、透谷の記念館をつくることが夢です」と、夢は大きい。

(週刊『文教ニュース』平成10年1月26日号より)

赤い夕日が沈む(7) 後編(3)

II私のシベリア抑留生活 II

木曾正雄

六 ヤクドニヤの病院生活

この時は歩行も困難な重体なり、入室後は絶対安静で便所にも行つてはならなかつたまま寝ていた。マイヨール(少佐、彼は当病院の医院長であり、腕ききの外科医であった)の診断治療により、入院後はめきめき良くなつた。

私の病室はこじんまりした静かな部屋で、他の入院患者もまた後から入院して来た患者も皆よい人ばかりで、気持ち良く愉快に療養することができた。此処の病院は内科、外科、伝染病科と囚人の患者をいれて二五〇人ばかりであり、外に勤務者を含めても三百人にならない程の小さい病院であった。

この病院で初めてソ連の看護婦の看護を受けた。女医しか見たこともなかつた

病院で綺麗な看護婦に接し、親切に面倒をみてもらつた。前にも書いたことがあるが、同じ部屋の患者でも、係りでない者はどんなに苦しんでいても、絶対見向きもしないが、自分の係りの患者であると、とにかく今までよく面倒をみてくれた。だんだん快方に向つて自由に歩けるようになると、掃除がやかましいので、毎日午前中は掃除の手伝いをした。

此處の病院の給与はヂストニックとオッズに分かれ、ヂストニックは、特に身体の痩せた者に、朝夕は二五〇瓦づつの黒パンにスープ、昼はスープと飯で、量は少ないが脂肪分や栄養に富んだものを食べさせた。オップスは朝から二百瓦のパン、昼は飯とスープ、夜は飯だけで、ヂストニックより多少飯の量が多いが、砂糖はヂストニックに対し、オップスは二

〇瓦であった。室内でも喫煙は非常にうるさく、夜になるとベチカの前でかくれて吸つた。勿論煙草の配給はないのだが、新しく入ってきた患者が煙草を持つていると分け合つて吸うのである。

この年の始め頃、「友の会」なるものが出来、我々捕虜生活の向上のため、色々の運動が行なわれた。私の入院中は民主運動がだんだんと盛んになって、各カローナー(収容所)から講習員が地区本部やハバロフスクに講習を行つて、講師となつて帰り、カローナーの民主教育にあたつていった。この当時は、民主主義をもつて帰国的第一条件とし、毎日のようく病院でも教育させられた。

五月に入つてヤクドニヤ地区的第一回内地帰還の選考があり、勤務者を混ぜて五〇名近くの者が選ばれ、五月末頃ヤクドニヤを出発した。

五月三十一日私の火傷も全快したので、退院と同時に第三〇二収容所のオカ(虚弱者体格等など最も瘦せた者)梯団に送られた。

ソ連では我々捕虜や囚人に対する月例身体検査を行なつて、虚弱者を休養させる温かい制度を設けている。しかし、これらの弱体者に対しても、「働かざる者は食うべからず」の鉄則は適用される。

オカは病人ではないので、食べるための労働は最小限にしいられる。三〇二収容所でも我々は衣食住に對する當内の軽い作業を行なつた。即ち炊事、水汲み、薪作り、壁塗り、屋根葺き、簡単な大工仕事、當内の美化作業、舍内の清掃整頓等である。

この収容所のナチャニックは、お化けのニックネームのある神経質な上級中尉で、彼は機嫌の悪いときは、轆轤谷に青筋を立てて暴れ回る。團長の庵屋敷さんは、ナチャニックの性質をよく理解した。大分良くなつたが、オカ梯団でありながら、午前中三四時間午後三、四時間の作業をさせられた。

我々は半裸になつて仕事を

した。民主運動も盛んになつて、杉山講師を中心となり、民主運動の徹底した者でなければ内地帰還はさせないとまで言われたので、我々は昼夜の別なく暇さえあれば、新聞やパンフレットを読み、社会主義や共産主義を勉強した。

今度ダモイ(内地帰還)はこのカローナーが中心となつて、オカや病人を先に帰すと噂されていたので、我々は期待していたが、事実は六月に十四名の者が帰つたのみであつた。

給与は悪く、食糧はポーミ粉(とうもろこし粉)とソーヤ粉(大豆粉)だけで量も少なかつた。七月半ばこの収容所は閉鎖され、我々は内地に帰れるのだと思つていたら三一七収容所に集結され、私は二級の体位となつて、ウルガル地区の四〇五分所へと送られた。四〇五分所においては、當内作業と昼夜の別なく台車の土砂卸しの作業であった。間もなくカローナー全体が、四二三収容所の囚人と交替することになり、七月下旬四二三収容所に行つた。

八 第四一三収容所

この収容所は鉄道線路から四糠ばかり入った所で、水と薪とは不便な場所であり、ウルガルの駅までは五糠程あつた。今まで囚人のいたカローナーであつたので舍内外がとても汚く、汚物が其處此処に捨ててあつて、目もあてられない醜状であつた。

プララップは非常にとんでもない人で、我々の作業状態についてはあまりうるさい事は言わなかつた。嘗内作業の人員は最小限度に制限し、大半の者が四糠も離れたカリエルに行つて井戸掘りや台車卸しの作業を行なつた。我々にとつてこのよいプララップも長くはいなかつた。八月半ば頃、彼は本部に転勤となり、代わりのプララップが来たが、新しいプララップは作業に関するはうるさい人であつた。

丁度この頃私は胃腸を悪くし、下痢が続いた。主食のポーミ粉や大豆粉が悪かつたらしい(粉といつても粉末ではなく、いわゆる引き割りで炊いても完全に柔らかくはならない)。

夏も終わり秋になろうと、いうのに毎日天気が悪く、

路盤工事の土砂が必要なので、井戸掘り作業を非常に水と薪とは不便な場所で舍内外がとても汚く、汚物が其處此処に捨ててあつて、目もあてられない醜状であつた。

兵にすすめによつて、二十一日ウルガルの病院へ入院した。この病院はソ側の囚人の病院で、日本人はあまり収容出来ないので、翌日ヤクドニヤの病院へ転送された。

兵にすすめによつて、二十一日ウルガルの病院へ入院した。この病院はソ側の囚人の病院で、日本人はあまり収容出来ないので、翌日ヤクドニヤの病院へ転送された。

ウルガルの病院は朝食後八時頃出発し、五糠の道を歩いたとはいえ、遅くも九時半頃にはウルガル駅に着き乗車したはずで、発車したのは午後一時過ぎになつてしまつた。

シベリヤにおける我々捕虜の長距離輸送は、箱型は無論の貨車で、走るときは無人の広野を五、六時間無停車で突っ走り、便所がないから小便是とにかく下痢をしていると困つた。機関車に給水のため、駅のような所に停まるところ二、三時間か半日は停車している。ヤクドニヤの駅に着いたのは午後十時頃で、患者のうち比較的元気な者が足の骨折患者を担架でかつき、百五十米ばかり運搬して、一同病院から差し回されたトラックに乗つて真夜中病院に辿り着いた。

この病院は九月始め、ハバロフスクの陸軍直轄の病院となり、患者の治療や診察をする直接の医師は日本院人であり、若干のソ側のドクトルと看護婦を除いて

食欲がない者(そんな人は一人もいなかつた)以外は、子供のように食物ともなると作業は継続され、穴の中に入つてすつかり冷えたため、下痢は益々ひどくなり、血便が出るようになつた。

九月十六日入室し、衛生兵にすすめによつて、二十一日ウルガルの病院へ入院した。この病院はソ側の囚人の病院で、日本人はあまり収容出来ないので、翌日ヤクドニヤの病院へ転送された。

ウルガルの病院を出発し、途中汽車の中で(汽車といつても貨車である)黒パン五〇〇瓦、鯨一匹、鮭一切、砂糖三〇瓦、肉および穀物若干を一食分として分配されたので、パン、鯨、鮭、砂糖は汽車の中で食べてしまい、その他のものは、ヤクドニヤの病院へ十六名分まとめて持参した。

今回に限つたことではないが、我々がソ連に捕虜になつてからは、たとえ一日十数回下痢をする症状であつても、常に腹半分位しか食べていないと、全然

は、勤務者は全部日本人であつたから、我々は安心して療養を続けることができた。

まだ入つて間がない病棟であつたので、一つの病棟に内科、外科、結核患者が一緒に入り、他の病棟は修繕中であつた。勤務者は朝八時から夕方七時まで作業をして修理を怠いでいた。

前回此處に入院した時と違い、規律正しい生活で、綺麗に掃除が行き届き、食事の配膳室も別になつていて非常に感じが良かつた。なお、毎日煙草が十瓦づつ配給になつたので、煙草の配給を有り難く思つた。煙草はマホルカといつて、葉や茎を刻んだもので新聞紙を七×五厘位の大きさにぎり、一辺をつばでぬらし煙草を包み火を付けて吸う。

入院早々からダモイの噂があり、病人は全快次第内に院内や指令部や倉庫に行つて軽作業を行ないつつ身体の回復をはかり、作業梯団に行く日を待つのである。退室後は身体がふらして重い物は担げなかつたが、次第に元気になつて、皆と同じように作業が出来るほど回復するこ

とが出来た。

東満国境 小豆山の死闘 (7)

小豆山再訪

松本茂雄

勤労動員先に届いた召集令状入隊先が不明のままに渡満と初めて知らされた初年兵教育を受けて

国境の代湿地帯で

(以上一六七号)

穆稜陣地 ソ連軍の戦闘

(以上一六八号)

小豆山の戦闘 (以上

一六九号) 一七〇号)

草むすかばね 部隊離散

(以上一七二号)

遊撃戦 ソ連軍の捕虜に

(以上一七四号)

コムソモリスク第一収容所

(以上一七四号)

小豆山再訪 記憶再生

(次号以下)

忘れ得ぬ人々 慰霊祭

いた。

復員列車は翌日の午後、

上野駅に停車していた。何

時間も出発を待っているよ

うな気がした。私は放心し

たように座っていた。時が

たゞ過ぎていった。

角帽をかぶった大学生の

アイスキャンデー売りが、

木箱を胸に下げ、チリン・チリンと鈴を振りながら歩いていた。それを見た時、私は急に

一学校へ戻ろう！

と思つた。そうだ、学校は休学届を出させられたまゝなのだ、と我に返つたように思えた。私のすることとは学校へ戻ることであつた。

郷里に帰つて一ヶ月ばかりで、すぐに東京へ出た。

取り敢えず新橋木挽町の知人の家に下宿した。

二階の窓から顔を出すと、仕舞屋(シモタヤ)が軒をつらねていた。北側の隣家から三味線の音が聞えて来る。私は畠の上の足を投げ出して、ぼんやりとしていた。

いつの間にか、私の中にたよやく重く居座つたようだ。私は放心した。私は放心したままだった。私は放心したままだった。

いつの間にか、私の中に

は四年前のことが駆けめぐっていた。

……国境で見た長い地平線。川を挟んだソ連の山々。

練習の合間に見つけた迎春花。きれいな水が流れている穆稜の街角。頭上に響き渡つた教会の鐘の音。……そして又、砲が、戦闘が、抑留が、労働が。あの恐ろしさ、あの悲しさが。あの痛さ、あの辛さが。あの寒さ、あの空腹が。

演習の合間に見つけた迎春花。きれいな水が流れている穆稜の街角。頭上に響き渡つた教会の鐘の音。

演習の合間に見つけた迎春花。きれいな水が流れている穆稜の街角。頭上に響き渡つた教会の鐘の音。……そして又、砲が、戦闘が、抑留が、労働が。あの恐ろしさ、あの悲しさが。あの痛さ、あの辛さが。あの寒さ、あの空腹が。

今ここで、こうしている自分とうまく繋がらない。時間や空間が、現実の私へのうまい橋渡し役にならないのであつた。

五十年目を迎えるに当つて、あの戦闘を総括しなければならないと云う自分が責任・使命観になつていつた。五十年間曖昧にしてきた「この拘り」にピリオドを打とうと心に決めて、一昨年九月に穆稜へ行つた。しかし穆稜迄は行き乍ら、どうしても小豆山を探し出すことが出来ず、飽きらめ切れない思いで帰国したのであつた。

ところが、昨年ふと目にした読売新聞の記事が縁で、小豆山で開つた重砲隊の方々と一緒に、念願の再訪をかなえることが出来た。平成七年十月十一日、重砲隊の天田達也團長以下

台を据えて仕舞つた感じであつた。遠近法で見る筈の時間や空間ではなく、いつも遠い日の小豆山の記憶の中には在る。

中から、遠くに小豆山の全景が見えた。車内にはどうも起きが起きた。小豆山は小さな独立した普通の山であつた。五十年の間思い統けて来た山は、これだったのか、といさゝか意外であった。

小豆山再訪

あの戦闘とは一体何であつたのか。自分にとつて、どんな意味を持つもののか、と自問することが多くなるばかりであつた。

五十年目を迎えるに当つて、あの戦闘を総括しなければならないと云う自分が責任・使命観になつていつた。五十年間曖昧にしてきた「この拘り」にピリオドを打とうと心に決めて、一昨年九月に穆稜へ行つた。しかし穆稜迄は行き乍ら、どうしても小豆山を探し出すことが出来ず、飽きらめ切れない思いで帰国したのであつた。

バスは直に山麓に近づき、小川を越えた。それを見た時、私に五十年前の記憶が蘇つた。今は一本の木もない原っぱの中の小さな流れ。しかし、あの時の記憶は森林の中であつた。私の頭に有るあの時の様子と現実の姿を結び切つるのは、余りにも困難な程の変わりようである。私はあの時の姿を記憶に再生し、確認しなければならない。その為にやつて来たのであるから。

あの時の、この水辺の状況は、テーブルクロスに残つたコーヒーミニの様な記憶痕跡である。繰り返し繰り返し、記憶の中から引き出しては見続けて来た川の水である。林の中を流れるこの川は、もう少し水

十月十三日の朝、穆稜招待所を出発した小型バスは小豆山を目指した。バスの中から、遠くに小豆山の全景が見えた。車内にはどうも起きが起きた。小豆山は小さな独立した普通の山であつた。五十年の間思い統けて来た山は、これだったのか、といさゝか意外であった。

量があり、丸太で作った簡単な橋とも言えない橋が架けてあったのだ。そして、記憶の中のあの喧騒にもう一度耳を傾けようと努めたが、音も無い緩やかな流れがあるだけであった。

小川の直ぐ向う側に、小豆山の山麓をめぐる一本の細道が見える。又、あの朝は前夜の濃霧が少し晴れてきて、初めて小豆山の一部を頭上に見た。そこは切り立つた岩肌で、無気味な重苦しい山のイメージを增幅させたのであった。

しかし、今バスから見ると明るい空間である。確かに一箇所だけ記憶の岩肌があつた。嗚呼、こゝだつたのかと思う間もなく、バスは五、六軒の集落の中に停車した。目的地に着いたのである。バスを降りる時、私は強く緊張していた。再び生きて小豆山の地を踏むのである。言葉にはならなかつた。北側に、忘れ得ぬ小さな水溜まりのような流れがある。

——この川だ！

私は忙しく周囲を見渡した。確かに此処に違ひない。現在は柳毛河と呼ばれてい

る川の上流であつた。湿地や無効の水溜まりだつたところは土が盛られ、アヒルや数頭の牛が放されている。

しかし間違いない、あの時の場所だ。ソ連のジープに追われ、撃たれ、傷を負い、隊から独り取り残されたあの場所である。私の戦死として公報された場所である。

私は一瞬どうすべきか、うろたえた。湿地であつた辺りに走つて行きたい衝動にかられた。当時の草むらは無くなつてゐる。でも、そこに腹這いになつて、あの時を偲ぶ筈だった。それは五十年間思い続けたプログラムであつたのだった。

バスから降りた一行は、先頭は早くも最終目的としている山頂を目指して山を登り始めた。自分も遅れる訳にはいけない。団長は木の枝を切つて杖を數本用意されていて。私は水溜まりをたぐり寄せるよう後にから後へと終ることのない思い出となるのが常であつた。他人には伝えようもない、遣り場のない感情の約違反の様に責めた一瞬であった。

忘れ得ぬ人々

小豆山は一変していた。

激しい砲撃を浴びて金山が焼け果て、今は火焼山と呼ばれていた。当時の太い木や森林は無くなり、その後に植えた低い椎の木の林が、あちこちに固まつてゐるだけである。視界はひらけ、明るい山に生れ変わつていた。

山麓の緩い斜面は、二中隊が砲を据えた場所のようである。砲手であつた私は、山頂に上つたことはなかつた。

「山は二つあつた」「ピナツ型の山」、「登つたら更に左の方へ行つたところ」などと、いろいろな人から教えて來たが、その通りの山であつた。

しかし登りの一歩々々は記憶の再生であり検証であつた。虎林から穆稜へ、そして小豆山へ。その間の出来事は余りにも多く、糸をたぐり寄せるよう後にから後へと終ることのない思い出となるのが常であつた。他人には伝えようもない、遣り場のない感情の堂々巡りであつた。

あの興凱湖畔で別れた中学校の先輩高木薰さんと

学校の先輩高木薰さんとは、あれが最後となつていい

て帰国後、彼の母上(仙台市在住)に手紙を出したところ、すぐ返事が来た。

がつて驚いたらしい。偶々病床にあつた上の姉は、それを知り、直後の十二月八日私の葉書を枕許に置いたまま亡くなつたのだと、復員してから聞かされた。

の手許には、その葉書と共に翌年になつて福島県が市に出した戦死取消しの通達書が残されている。

先日の御手紙、失礼ですが我が子からの便りのよう嬉しく拝見いたしました。思い出のかずかず、嬉しいやら胸のつまる思いでいっぱい御座居ます。彼は十四年学び卒業してすぐ紙一枚で満洲に旅立ち、死に行つた子です。五人の男子

を母一人の手で教育し、三人を國の為にと失いました。どうぞ、いつも心の友として思い出してやつて下さいませ。——

三二世報第三四九号
昭和二二年九月二日
福島県世話課長
半井顯雄

福島市長殿

留守業務局に照会中の
処、受弾戦死したとの
記に戦死した旨死亡報告書送付したが……

ソ連残留者について

さきに三二世公第九四号を以て本籍地経由左記に戦死した旨死亡報告書送付したが……

又、この山麓で私が敵に撃たれた時、他の二人の戦友は私が戦死したものと思ふ報告したらしく、家には戦死の公報が届けられた。しかし、その後になつてシベリヤの収容所から昭和二十一年八月万国赤十字社の赤い捺印のある俘虜用郵便葉書を出すことが許され、同年十二月始めに自宅へ届いた。

既に戦死したことになつた。

福島市 松本茂雄

以上

ていた私の家族は飛び上つて驚いたらしい。偶々病床にあつた上の姉は、それを知り、直後の十二月八日私の葉書を枕許に置いたまま亡くなつたのだと、復員してから聞かされた。の手許には、その葉書と共に翌年になつて福島県が市に出した戦死取消しの通達書が残っている。

終戦直後、地方新聞は戦後の庶民史

『神静民報』労働者 近田茂芳氏に聞く（下）

植田博之

地方新聞は戦後の庶民史

書く効果と書かない効果

記者の宝は人間関係と礼節

一 駆け出しのころ

昭和二十一年（一九四六）二月十一日が神静民報創刊の日ですね。私はその二ヶ月後に入社、初めての配属は藤沢・鎌倉で二年ほど担当しました。テリトリーは横須賀、藤沢方面から県中央部でした。当時中央紙の地方版のほとんどは貧弱で、小さい記事などは掲載されず、当社と神奈川新聞がもっぱら地方記事を網羅していました。だから今でも、當時の歴史的な資料としての価値を持っています。

何時だったか、茅ヶ崎市から市制何周年かの記念行事に、市史を編纂したいので、当時の取材記事を再録させて欲しいとの依頼を受けています。

当時は中央紙は四社刻で各紙も神静と同じタブロイドの時もあつたし、二ページ、四ページの時もあった。タブロイドの時は地方版なし、四ページでも『地

には担当していました。同

市内の東洋陶器ほかのことなど記事にしていましたが、中央紙の地方版などには細かいニュースはまったく掲載されませんでした。

昭和二十五・六年まで中央紙が夕刊を出すまでの間、小田原近辺をはじめ、この地域のもうものの記事を掲載していく、今でも当紙を保管している小田原市立図書館の当時の石井館長から貴重な記録だと推奨されました。

担当していた藤沢に高座・鎌倉地方事務所があつて、そこの経済課によく出入りしていました。地方事務所も藤沢署も私の担当でしたが、経済課と署の経済担当から、綾瀬町（現在綾瀬市）が不正に闇の木炭を大量に買い込んだことを聞き込みました。これは藤沢署管轄の経済事犯として問題になりました。後ろめたい気がしましたが、あの味は忘れられません。

書いた効果、書かない効果、判断の難しさもあるでしょうが何でも書けばいいともでもありませんね。新聞記者としては書くのが職責ですが、本人が然るべくことをすれば、書かなくとも良い時がありますね。

たいした事件でもなくて、で欲しい。これは暮れに向かって燃料不足の折りから、町民に配給するためのものであり、不正な入手と問題になりかけていることは承知している。その方は責任をもつて解決し、私が責任は取るから、配給するまで町民のために勘弁して欲しい」と懇願されましたよ。

ともかく私は、暮れに向かって町民に、確かに配給されるのを見届けるまでは記事にしないことを約束しました。大晦日の二・三日前、夜中にまた町長と町会議長が来て、「本当に助かりました。これで町民は暖かく正月を迎えるでしょう」お礼にと、当時、大変貴重なつきたての餅をもらつた。後ろめたい気がしましたが、あの味は忘れられません。

市民の血税を預かる公的機関で、市民に不利益になるような事は徹底的に追求して書かなくてはなりませんが、個人の問題なんかを感情的に書くことは問題です。公的な人というものは、二・三年で替わってしまう

市長にしても永久にやる訳ではありません。然し個人との感情のもつれは、何代も続き、何時までも新聞社に崇りのようについてまわる。長年記者をやってきた

「感」ですかね。

昭和二十三年から小田

川崎版、横須賀・三浦版、相模版と分かれてい、各地方版は今の

方版神奈川は横浜版、社説ぐらいのスペースしかとつていなかつた。そのため中央紙の

ともかく私は、暮れに向かって町民に、確かに配給された」と事実を書けば、それで良いじゃないですか。特に顔の出るテレビなどは慎重にすべきです。

本人は別としても、家族などが応援してやられた訳でも何でもないのに、じつと堪えている人に聞き回っている。そんなこと書かな

くつても「これこれ事件があつた」と事実を書けば、

それで良いじゃないですか。

近所の人々にまで当事者個人のことを聞きまわつて

ニュースにする。あんなの

は大嫌いです。

原・箱根の担当になり、箱根を回っていた頃、旅館M屋の主人Hさんから「旅館協同組合の組合史をつくるから仲間に入って欲しい」と頼まれました。承知したところに、Tさんが入つて来て「そのメンバーの中に神静民報がいるから嫌だ。親父の遺言だから一緒に仕事はできない」といわれビックリしました。

Tさんの父親が町長をやつていた時に、神静民報の誰かが私的なことで個人攻撃的な記事を載せたらしい。私は無理して仲間に入らず、Tさんとはそれからも仲良く付き合いましたが。

情報開示の叫びの中での問題も世界規模で大きく取り上げ始めていた。最近の週刊誌やTVに見る報道は、有名人のみならず一般の市民、少年に対してまで、行き過ぎが気に掛かる。発行部数や視聴率アップをねらつて面白おかしく報道しているとしか思えない。ダイアナ妃の死も過熱したジャーナリズムの犠牲

としたら、憤りを感じる。今日は彼女の一周忌、微笑みを浮かべた妃の写真の前に、山のように積まれたバラの花束が悲しい。

二 サツ(警察)まわり

僕らの若い頃は、小田原署に行くと事件簿というのがあつて、それを見て後はデカ(刑事)部屋をまわるくらいが仕事、はじめは事件簿すらありませんでした。その後警察で発表したいものだけを書いたレリーズを準備してくれる。本当はそこに出ないものを探さなければいけないので、それらを使って記事にしたり、重要事件があれば署の担当者から話がありますから、記者としてはすっかり怠け者一方になってしまふ。

地方紙の記者の場合は、時代だったし、小田原の土地柄が平和であつたことでも、あつてサツダネ(警察記事)の大きなものはあまりありませんでした。

中央紙の若い記者が政治家を追つかけるような、「夜討ち朝駆け」など無く、のんびりしたもんでしたよ。逆にあんまり働くと目立つちやうから止め、なんか言われたりして。

恐いこともたまにはあり

ました。当時、国警と市警とがつて、国警がやくざの親分をパックした(逮捕した)ことがありました。早速記事にしたら、「ついぶりせいと書いてくれるじゃねえか、明るい夜ばかりはねえぞ。うちには命知らずの若いもんが大勢いるからな」と親分がデカ部屋で言うんですからね。競輪場でも脅かされましたよ。まあ周りに人が大勢がいるから大丈夫と思いましてが、今の時代ではどうなつていてか分かりません。起つたことだけを書いてただけのたいした記事ではなかつたのですが、今後なにを書くか分からぬから、口封じのつもりで脅かしたんでしょう。

ともかく、のんびりした時代だったし、小田原の土地柄が平和であつたことのタレコミ(情報)で得られるといいますが、新聞記者にとって最も重要なことは、常日頃の人間関係だと思います。相手が信頼してくれることによつて大事なニュースが得られる。忘れもしない一つの例は、箱根町のある有力な人が、「町でかなり重要なものを買うらしいぞ、調べてごらん」と言つてくれました。調べた結果、古文書「御闘所日記書技」(箱根関所通行記録の原本であつて十数刊、後に出版されてい)を箱根町が買う交渉を

察(市警)と二本立てになつた。

国警は郡部を管轄し、市警は小田原市を管轄していた。いわゆるシリフとボリスである。

当時の新聞記事は経済事犯いわゆる闇取引(特に食料)の取締記事と、新体制の発足、復活、復興の見出し記事が目に付く。

三 トクダネ(当社だけの記事)

一般にトクダネは偶然か、人間関係か、読者から書かれたタレコミ(情報)で得られるといいますが、新聞記者にとって最も重要なことは、常日頃の人間関係だと思います。相手が信頼してくれることによつて大事なニュースが得られる。忘れない一つの例は、箱根町のある有力な人が、「町でかなり重要なものを買うらしいぞ、調べてごらん」と言つてくれました。調べた結果、古文書「御闘所日記書技」(箱根関所通行記録の原本であつて十数刊、後に出版されてい)を箱根町が買う交渉を

しているとの情報でした。これらに関する記事にしてようしましたが、町長、助役、沢田秀三郎さんなど、購入を検討をしている町のメンバーから「正式契約するまでの、記事にするのは待つて欲しい。今書かれたと他から話が出てきて値段が釣り上がつてしまふ。その代わり決つたら貴社に先に情報提供するから」といふことになりました。秀さんは、後で他社からなんでも静だけが知つていたんだと町は抗議されたらしい。信義を守つて得た大トクダネでありました。

タレコミはほんのわずかしか記事にはなりません。しかし記事にはなりません。何故かといふと裏付けを取らなくてはいけないこと、更に重要なことは関係者の名譽と、後々のことを考えなければならないことです。

市内のある中学校で、男子教師が男子生徒にワイヤー行為をしていると被害者の家庭から電話がありましたが。事実関係を確かめ、早速記事を準備して丁教育長に面会しました。教育長は

知つていて、「今その処分を考えているところだから書くのだけは待つてくれ」と言つてました。私は然るべきことをちやんとしてくれれば書かないが、記者が握り潰したと思われたくなつて、と申し入れました。結局、被害者も教育委員会に事情を申し述べ、先生は退校、被害者も納得する結果になつたので紙面には何も載せないで終わりました。

匿名であろうとも、被害者の少年のことは知れると、この結果が一番良かつたと思つています。

この種の多くの情報をいただいたが、握り潰したと思わぬよう、必ず調査を徹底して本人の納得するかたちで解決、記事にしない場合も多かつたものでした。

二十六年、病氣になつた頃、徐々に紙も潤沢になり、読者も増えて行つた。神静民報にとつても好材料だったはずなのに、神静の記者達は引き抜かれて行つた。朝日、毎日、読売、NHK、共同通信、東京、産経、神奈川新聞へと、各社が増ページ、増刷そして夕刊も復活、発行を始めたためだ。他社へ移った記者は、神静民報で育つたプロだ。近田氏は今も一人一人の名前を覚えている。

相手に不正があつた時などは堂々と議論し、とことん眞実の追求をするが、しかし態度と言葉だけはいつも注意するべきです。会社でいえば新人社員が、部長級の人と話しているのと同じであつて、若い者には常日頃から戒めてきました。

時々耳にしますが、「コワモテでいかなければ記事は取れないぞ。無礼なる言動で相手を怒らせれば本音を引き出せる」、これは以外でこんな事で眞実を知る事はできません。こんな事を教えるワイル先輩記者とあります。「あんた達は、入社して一・二年の新米記者だ。警察に行つても、役所に行つても相手は十年

をきつかけに、長年の夢である小説家になろうと決意する。しかしながら生活に戻る。神奈川新聞を経て、再び神静民報へ。

新聞記者はどんなに若くても、年配の人、町長、市長、署長でも相手にしてくれます。時には、おべんちやらみたいなことをいうでしょう。すると自分が偉くなつたような気になつて、横柄な口を聞いてしまい、後でホヅをかむことになります。

記者生活を退職しても「ヤ一元気かい、今何やつてんの」なんて、親しく声をかけられるような人間でなくではならないと思っています。

虚と真摯な態度で臨めば、相手が教えてくれる場合だつてあります。

中央紙の記者でこんな人を、何人も見てきましたが、権力を傘に着て、こんな記者生活を送っていた人は退職した時、凄く惨めな生活を送つていた例もあります。

昭和二十六年（一九五二）初めて文芸同人誌『葉脈』に書かれて以来、多くの同人誌に寄稿、その間、尾崎一雄、川崎長太郎、両先生のご指導を受ける。

平成四年（一九九二）、今までの集大成として、二十編を選んでいます。

『白い風景』近田茂芳作品集』を河出書房新社から出版された。軍隊時代や戦後の新聞記者としての体験を背景に豊かな内容と美しい文章で綴られている。

平成四年（一九九二）、今までの集大成として、二十編を選んでいます。

昭和二十六年（一九五二）初めに『葉脈』に書かれて以来、多くの同人誌に寄稿、その間、尾崎一雄、川崎長太郎、両先生のご指導を受ける。

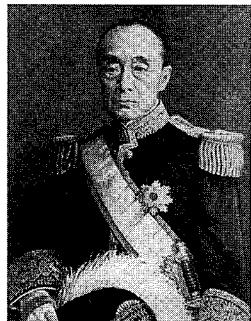
平成四年（一九九二）、今までの集大成として、二十編を選んでいます。

鎌倉市に生まれる。昭和十六年から二十年、第一海軍燃料廠工員養成所（戸塚）にて応用化学を学び、同燃料廠研究室にて航空燃料の研究に従事、昭和二十一年、神静民報に入社、後に常務取締役編集局長。

前号で『神静民報』が昭和二十二年五月、自前で印刷出来るようになるまでは、「足柄印刷」が印刷を引き受けたとあります。が、「相洋印刷」の誤りです。原稿には「相洋印刷」とありました。が、編者が間違つた校正をしてしまいましたのでお詫び申し上げます。

と普通の記者と違つた視点にたつて行動した記者生活、そして絶えまざる文学への情熱に感動する。

と普通の記者と違つた視点にたつて行動した記者生活、そして絶えまざる文学への情熱に感動する。



大礼服姿の慶喜 (明治35年)

国府津の慶喜

南里 哲

今年一月からのNHK-TV 大河ドラマ「徳川慶喜」の放映により、書店の店頭には、慶喜に関する本が夥しく並んだ。尤も九ヵ月も経つた今では、その売り上げは一巡したと見え、店頭からはその数はグーンと減ったが、TVでの人気は落ちていないようだ。

ところで、「国府津での慶喜」という同じ題名で、故・西山鉢太郎氏が、既にこの『小田原史談』第一四七号(92・1)で発表されているが、国府津によく静養に来ている。その場所は、旧幕臣大鳥圭介の別荘であつた。

ついでながら、大鳥圭介について調べてみると、彼

慶喜が国府津にきたのは旧幕臣の別荘で気安さもあつたであろうが、彼には、持病の喘息があつた為である。

このことを記した『女聞書き書き徳川慶喜残照』(朝日

文庫・遠藤幸威著)に侍女小島いとの書き書きがある。

一位(慶喜のこと)さ

まには少々喘息の氣味がありのため晩年の

数年は毎冬期の十一月

になりますと、神奈川県・国府津の旧幕臣・

大鳥圭介さん(明治四十一年死去)の御別荘へお

いでになりました。

ここがお気に召していらしゃいましてね。

大鳥さんの死後、御前

が購入しようとなさつたのは、ここです。そ

の時、大鳥家の家扶の方に、「どうぞ御自由に

お使い下さい」

と言われましてね。

安心して毎年参させていただきました。気候

のいい風光明媚な処と

いえましようか。蜜柑狩りにお出掛けの時な

んぞ、よく付近の農家へお立寄りになりました。

明治末年でも一位さ

まの人気はたいしたもの

で「十五代さまがいらっしゃった! 前の将軍さまがいらっしゃった!」つ

て大騒ぎをされたもの

で、はしり物や特産品の献上品がどつさりありましたわ。

特にお子さんが大勢押しかけて参りましたよ。

そこであたくしや女中達も総出で子供さん

「おひねり」を作るのに大忙してお外出前の

御別荘つたらそれこそ猫の手も借りたい程度で

した。

その「おひねり」を表の職員がくばるのを

御覧になるのが、また一位さまのお楽しみで

いらっしゃいましたね。

春になつてお出ましの時は、畠で土筆をあ

たくしどもにつませるのを御覧になるのも、

これまたお楽しみの一

つで、今思うとタワワイ

のない、お淋しいお樂

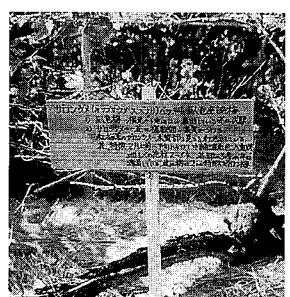
しみでした。けど、あ

たくしどもが両手にもちきれない程とつたの

を御覧になると、きまつて、「サ、すぐ家へ

送りなさい」

とおっしゃって職員に指図なさつて下さいました。



大鳥圭介の持ち帰った臥龍梅

大鳥別荘があつた場所は石田礼助氏の住居(国府津三〔西番地〕)の近くにあって、当時とは様相が変っている。大正十二年(一九三三)の関東大震災や新幹線と厚木バイパス道路トンネル工事の影響を受けて、自然環境は一変した。ただ当時を偲ぶものに、大鳥圭介が李鴻章から贈られたという臥龍梅がキウイ畑の片隅に残つてゐるが、それも既に老衰期に入つていて見る影もなく、あたり一帯、慶喜が静養に來た頃の面影は全くない。もし残つてゐるとしたら、その静けさと、冬は日溜まりで温かいという環境だけであろう。

震災日記

(14)

片岡永左衛門

大正十三年

二月八日 風雨

夜来大雨、今朝より小雨となりしも大風を加え午後よりやむ。

(銀行を)一時(に)退出、復興会常務出席、復興経費の報告あり。なお、その請願運動を継続する事とし、来る十三日、常務委員、神奈川県に登序することとし、五時散会。

本日、役場にて見れば、慰問品は三布の新しき蒲団なるが、これは、政府より送り来たりし品にて、外国その他より寄贈の金円にて調達せしなりと。或る者の談話には、その筋の御用商人と結託し、物品を高価に買い入れ慰問品とし、その間に不正を計りたりと。

先頃竹田の宮、当地を御覧になり金参百円を下賜あり。次いで、閑院殿下よりも金参千円を当地罹災者に渡し金額より差し引くと郡

長より伝え来たりたるが甚だおかしからぬ事にて町長より異議を申し込みたりと。

夜に入り樺太王子製紙会社の早房長徳、上阪の途(大阪に赴すこと)見舞いに立ち寄り久々の面会、暫時にして出立。

註 「三布」三幅布団(幅三尺約一m)指す四布(よの)は掛布団

九日 晴

大島久々にて悔やみに来るも、未だ病氣よろしからざる様子。

昨年より大謀網各漁場とも不漁にて、悲觀せしに、昨日、岩江漁場に七、八千鯛漁有り、社長山田又一、鮫持參。今日は大に心持ちよろしき日なれば何か花を尋ねながら来たと、郊外散歩にと誘わる。同情して木瓜一枝を切り、誘わる、儘に谷津に同行、夕刻帰宅。

小澤佐代子の梅に候云々。

まださかぬ梅のつぼみもあるものを匂ひのこしてとくも散るらむ

十日 雨

昨夜より雨、今朝は風もなく。昨日、行員と二日休みを修善寺に入浴の筈なりしに、招電にて拙者は同行せず、五時帰宅。

十一日 雨

龍夫トラホーム検査の評にて役場に行く。

十二日 雨

道路泥濘。明日県庁行き打ち合わせに寄る。

昨日の祝日に福住翁は從五位を贈られ、徳富先生は金杯を授与せらる。早速徳富さんに加章。

十四日 晴

土木課長は、震災復興費査定のため内務査定官(に)出張に付き、査定本部大磯に至りしに行き違いに横須賀に行き面会を得ず、また引き返して上京、都賀屋に止宿。

十七日 晴

前八時、西尾主事と一本喜徳郎私邸に訪問し、大蔵・内務両次官(宛)に添書を乞い帰宿せしも、本日は地方官会議最終にて面会不可能と聞き明日くるとし、拙者は、親一方立寄り、七時、都賀屋に帰宿。

十五日 晴

当町の震災の応急復興歳入の欠陥道路拡張会計金三百四十四万二千余円の補給を請願せしに、拡張の他は査定の上相当の補給あるべきも、里道拡張費金百十四万円余は補給せざるの方針と聞き、請願運動として町主事西尾、復興常務中田寿一郎、瀬戸留吉、秋沢嘉蔵、拙者五人は、八時十一分に乗車、県庁に至りしに知事不在にて地方課長に面会、土木課長は、震災復興費査定のため内務査定官(に)出張に付き、査定本部大磯に至りしに行き違いに横須賀に行き面会を得ず、また引き返して上京、都賀屋に止宿。眼鏡は、震災の際昨日、有り合わせの品にて間に合わせおりしに、前医の前田氏は、開業も不明なれば、慶應病院にて検定を受け眼鏡を注文し午後一木氏に至り、五時発にて帰宅。

午前七時、井上内務次官を官邸に訪問、面会陳情し次官の添書を持って内務省に土木局長に面会せしに、道路拡張は、補給不可能なる事情を縷陳せられ、この上は大蔵次官に面会は不必要となり、ともかく帰町と決したるも、拙者、一本氏に面会の為、途中にて別れ親方に止宿。

次官の添書を持って内務省に土木局長に面会せしに、道路拡張は、補給不可能なる事情を縷陳せられ、この上は大蔵次官に面会は不必要となり、ともかく帰町と決したるも、拙者、一本氏に面会の為、途中にて別れ親方に止宿。

浴場なく、銭湯に行くに非常なる大入りにて浴槽も流しも躰は躰と相摩し心地よからず。その後この程の雨にて井水少し出たれば風呂出来たり。

杉浦翁逝去せり。先年皇子妃冊立に対し、色盲の血統なりと反対の声政府側に生じ、山県公などは此の御大なりしに、杉浦翁これに反対なりしに、これには反政府側の権力応援し、遂に薩長の勢力争いなりしと揚言し大問題となりしなり。近来に至り翁は名声を種々揚げたり。

註「杉浦翁」杉浦重剛
〔八九〔一九四〕近江（滋賀県）膳所藩の藩儒の家に生まれ、明治三年（一八七〇）藩貢進生として上京、大学南校に入学。明治九年化学研修生としてイギリスに派遣されたが、病氣のため明治十三年帰国。

その後、東京大学の予備門長や寄宿係取締となる。明治十八年東京英語学校を設立（明治二十五年日本中学校と改称）。また、「読売新聞」「東京朝日新聞」の論説に寄稿、明治二十一年三宅雪嶺の「日

事業とともにジャーナリズムとしても活躍。この後国学院学監、皇典講究所幹事長、東亜同文書院院長などを歴任。大正三年東宮御學問所御用掛を命じられ、倫理を担当した。皇太子に対する講義は『倫理御進講錄草案』として後に出版された。

十八日 晴

夜に入り雨。昨夜尋ねる物あり。書画を取り出せしに、その中に文政五年の普請帳あり。披き見れば大凡建坪百參十坪ばかりにて金百四十両ばかりにて出来たり。当時の本陣は、板の間土間多く、木柱は太きを用いしも極めて粗末にて上段通りは少し念入るゝも、その他は、近頃の旅舎とは建て方非常に相違したるも安く出来しもの、この支払いは、内訳口口なるも、竹や

スに派遣されたが、病氣のため明治十三年帰国。その後、東京大学の予備門長や寄宿係取締となる。明治十八年東京英語学校を設立（明治二十五年日本中学校と改称）。また、「読売新聞」「東京朝日新聞」の論説に寄稿、明治二十一年三宅雪嶺の「日

尾崎祐子、明日埋葬に付き尾崎に兩人にて行き、十時帰る。

二十一日 風

福田寺に会葬。尾崎にて齋の供養を受け二時帰宅。

註「齋」供養の為にだす食事

二十二日 晴

山田より先日の木瓜、床に挿すなりと電話にて、新宅は始めてなれば帰り道一寸寄る。

二十四日 晴

午前八時十一分発にて保土ヶ谷に降り、円福寺に高田幸太郎の墓参り香を手向け、横浜・高田に至る。

二十九日

福住翁贈位祝歌の相談し、草山氏と尾崎に至たる。假屋の張付等細工も、先ず終われり。

二十八日 晴

掘り替え井戸出来ず、旧井は四間（約七・二四）なれど、今回は五間に掘り下げたり。震後諸々渴水、旧井の儘なるは甚だ稀なり。只この上げ井水の澄まぬが問題なり。

三月

一日 午後より晴

第二小学校にて訓導・生徒・同窓会会員の震災追悼に参列の通知あり。午後細君と参列、午後一時半より挙式。高橋訓導・生徒は十七名と同窓会員の木牌を並べ、供物・香華を供え、寺院団各宗僧侶の読経あり。

二日 晴

佐久間老人方に福住祝歌にて行く。帰途、停車場に寄れば親一来る。共に帰宅すれば、食後兩人にて墓参の途中、亮司に出会う。これも共に墓参となり、仮本堂に入れ、この程、幸子・泰子菩提のために寄進の五具足仏前に飾りあり。住職にたのみ買いしなれば、昨日代金七十円を支払いしと挨拶せしに、実は先日持参し、彌代の請求ありしも、最初より彌代金の内なる筈にて、最早、片岡様にて承知なれば、今更増し金は出来ませぬと申せしに、片岡様は先年葬儀の時、私の誤りにて負傷せしにお手當を下されしも、商売のためなればと辞退なせしに、強いて下され候関係もあれば七十円にてよろしいと申せしと住職の談話。なさけは人の為ならずはそか。

親一帰省の通知あり。二回停車場に行くも遂に来たらず。

本人」発刊に参加。教育

二十一日 晴

百八拾四文とあり。

二十六日 晴

（続）

墓碑にみられる夫婦愛

内田 清

拓本1

拓本2

拓本3

論争を呼びやすい金石文

墓碑も古文書である。広義の古文書は過去の時代の史料となる古い文書があるので、梵鐘・石灯籠・仏具などに刻された銘文も古文書である。材質が堅く・大きく・目立つものなど、永く残るが、破損や後刻、現地確認の困難さなどが重なると、史料として論争を呼びやすい。高句麗國の好太王碑(四年建立)の百年論争などがよく知られている。

城下・宿場町として近世文化がえた小田原は、古人の業績や辞世を刻んだ墓碑の多いことで、県下他市に比べて抜群の位置にある。小田原市郷土文化館の『小田原の金石文』(五卷)充年刊資料1)と言ふ網羅的な調査報告書はあるが、「町おこし」に殆ど活用されていない。私は文化財保護課の旧跡調査に参加して、多少知られているものでも、かなり誤認があることに気付いた。幾つかを挙げて、論争を提起したい。

来世を約束させられた平岡権六

妻の末期を励ました外郎規矩外

先ず本町の蓮昌寺本堂前の「平岡権太夫・妻墓」(資料1)から見てみよう。資料2も「平岡権太夫・妻供

城山の玉伝寺外郎家墓地左手中央に、拓本3を左側面とした十五代真和(資料1・2・3ともに直知と誤認)院規矩外日房居士と眞如院妙性日觀

養塚」としているが、拓本2のように「平岡権六夫妻墳墓」が事実である。資料1・3では権太夫が小田原藩御抱えの葺師あるいは砂(左)官棟梁と解説されているが権六に全く触れていないのは銘文誤認らしい。

次に辞世の解釈だが、私は夫に先立つ妻が、「妙法蓮華(仏法)に誓つて後の世でも夫婦に」と和歌で掛け、夫が漢詩と俳句で「泥と蓮の花の関係とは言え、世間されせず白蓮華のよう清々しかつたお前の歌が嬉しい、魚心に水心で来世を誓おう」と答えたものと鑑賞するのだが如何なものだろうか。「どろ」には「不身持ちな者」の意味もあるが権六が職人棟梁だつたりすると、妻の末期にあたつて大いに過去を反省し、夫婦の墓としたのかもしれない。



拓本1

採拓 内田 清



拓本2



拓本3

採拓 小田原市立
郷土文化館

大姉夫妻の墓がある。資料1・2とも夫の没年を天保二年三年としているが、墓碑裏面などで見ると妻ながら五十九歳で三年、夫は七十七歳で十二年が正しい。逆では夫妻の年齢差が二十七歳になり、実際の九歳と大差を生じ、人物や辞世句の解釈も異なってくる。

資料3は「妻と並べて二人の辞世の句」と記す。しかし私は「妻の辞世句と妻の末期を励ます夫の句だ」原俳壇の鳴立庵系を代表する程の俳と解釈する。規格外則ち菊外が小田所刻まれ、その一つが拓本3の様に句と同一面にあることは、妻の末期に夫が書き残したものと考えられるからである。

句意を解釈すれば一層はつきりする。太陽暦では六月八日なので、入道雲であろうか、「成長する峰の雲を見て、読経すら幻聴する」と詠んで、死後の不安を訴える妻を看取る夫が、「西方浄土への旅は、須磨・松島に勝る景勝・極楽への旅立ちだよ、恐れずに元気出して行こう。」と優しく励ます姿が浮かんでもると鑑賞するのには、穿ちすぎであろうか。

外郎家は日本一の由緒を誇る薬商人だが、鎌倉時代からの由緒を持つ酒匂村名主で回国の俳人とも交流していた鈴木家の娘だった妻仲女の、素直で、飾らない人柄が窺える辞世句である。また規矩外という型破り

の個性派らしい俳号を使つた菊外が暖かく妻を励ます姿などは、小田原の封建文化でも誇るべき一面である。

以上二組の町人夫婦の墓碑について紹介した。妻たちが夫に先立った理由はさておき、共に高い教養と夫

を巧みにリードする術を身に着けていたという歴史発掘の可能性と、事実・史実誤認で歴史が書かれていた事は、理解戴けたのでしょうか。そ

して写真や拓本などの初步的技術を身に着け、現場確認を大事にすれば、だれでも郷土史の通説など覆せるものだと強調してまとめとする。

注意してほしい語句

金石文の調査は一回だけでは済まない。資料整理や先行研究との照合過程で疑問を感じたら、何回でも現地を見聞して事実を確認する事が肝要である。

○拓本1 平岡權六夫妻墓の正面

辯世^(マ)誨句

因心院常照日觀

宝曆三癸酉
八月上二日

延享二乙丑

緑心院妙照日念

不染ニ世間ノ法ニ如ニ蓮華ニ在ニ水心ニ

A

朧月亭

泥乃因染怒^{ぬえん}も縁^{えん}で白蓮花

妙なるや法の蓮能花乃名尔

桃因述

○拓本2 平岡權六夫妻墓の右側面

辯世^(マ)

いざ後農吉^のをかけて契^{ちぎ}ら無^む

平岡權六夫妻墳墓

B

○拓本3 外郎規矩外夫妻墓の左側面

いざゆかん須磨

松嶋にまさる旅

仲女

経文乃大^かゑも加^かす可^か尔

C

峰の雲

天保三壬辰五月十日

ろうげつてい・とういん おぼろ月

や桃花など春にちなんだ俳号。因は拓本1の様に墓碑正面で三個所使われているのに、資料1で桃園、資料3で桃園・桃因と記しているのは何故だろうか。また資料1では亭が帝。

かろうか。らの、も見落とさない。
ら無^は……らん、の古い用法。

B



こえもかすかに (冥土からお経の)

声も幽かに(聞こえてくる)。古思毛^{カシモ}か寸可尔と変体仮名。碑文では変体仮名

資料2 資料3 飯田九一『小田原俳壇史』

物語』

よをかけてちぎらむ 世の文字に草かんむりがあるように見えるが、異

体字と欠損が複合しているのではなくかろうか。らの、も見落とさない。
ら無^は……らん、の古い用法。

名や篆書が変形誇張されている例や欠損部を文字に見たり、見落としたりする場合が多いから慎重に判断したい。この拓本では古の左右の、のうち右がよく見えない、夜間懐中電灯で影を造るとはつきり見える。

ぐれんどう
坂本易徳

30

相澤親之助のアメリカ便りは、更に続き明治二十六年十二月発行の『國東会報告誌』第三十三号にて「相澤氏の便り」として載る。意訳して紹介しよ。余談ながら記すと、司馬遼太郎氏によると、口語体の現代文になつたのは戦後のことであると云われる。そう云われて氣をつけてみると、候文は戦中まで尾を引き、軍人の私信によく使われた。また、法律は文語体で用語は極めて難解であつたことが思い出される。

口語体の現代文になつたのは戦後のことであると云われる。そう云われて氣をつけてみると、候文語は戦中まで尾を引き、軍人の私信によく使われた。また、法律は文語体で用語は極めて難解であつたことが思い出される。

岡部忠夫

相澤親之助が渡米した年（明治二十二年）の二月十一日には、「大日本帝国憲法」をはじめ「衆議院議員選挙法」や「貴族院令」が公布され、日本が法令を整え近代国家の仲間入りを試み始め

共に手を携え、一身を国家に捧げ外國から侮りを受けないよう以てし、内政がうまくいくように考へ、知徳優れた天子様を輔佐し、一般人民を安堵させる事を期すのは、元より我われの務めであると思う。この大任を負う我々会員は、常に自信重、自信の精神を養い、かわりにも、浮わついた軽はずみの行動を執らぬこと肝要かと思われる。

重、自信の精神を養成する
ことが出来るかと云うと、
人々各自その業を守り、そ
の道を行うにある。僅かば
かりの成功に満足せずに大
成を期するのは立派であ
る。しかし、重大な事とそ
うでない事が判らず、相手
側と自分の方をはつきりさ
せることが出来ず物の区別
がつかないで、急いで自分
の理想や目的を実現しよう
と突進して、遂に別れ道に

志を持った明治の青年の健全な精神と云うべきである。

我が郷土の少年の大きな悪い癖は、英雄崇拜の観念が甚だ盛んで、实业を卑しむことである。その傾向に馴染ませたならば、青年期に達したとき、わずかに他の刺激により方向を変え、どれもこれも丁度よくなるにしても、その気持ちの底にある英雄心から抜け出することは困難なことである。それはつまり我が国の教育が適切でなかつたからである。今の父兄の思想が狭隘なため、子弟の思想も知らず知らずのうちに狭隘とならしめ、いわゆる英雄崇拜

まるで分別のある大人が未熟な少年に諭すよう、
口調であるが、親之助自身の東京での遊学失敗の
経験から出た言葉であろう。それだけに親之助の
純粹な真摯な気持ちがうかがえる。

出会い何方を選んでよいものか判断に苦しみ、撤退する事も出来ないような状況は、血気にはやる少年に有り勝ちの事であるから、何事か爲そうとするときは、よく慎重に熟慮しなくてはならない。

【お知らせ】
◎本年度の一泊二日の史
跡めぐりは、十一月三、四
日寄居、長瀬から秩父に入
り翌日、三峰神社、雁坂ト
ンネルを通り、甲州の西沢
渓谷方面をまわる予定で
す。

些か所感を述べて通信に
変える次第である。（続）



7/26 氷の彫刻コンクール

街
い
う
い
ろ



7/26 小田原ちょうちん夏まつり



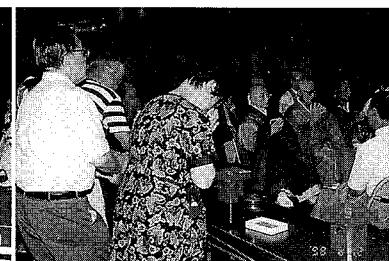
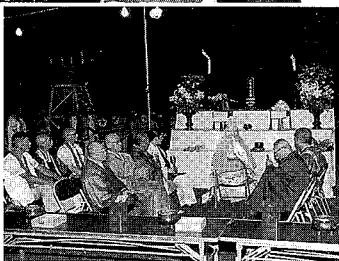
大松明



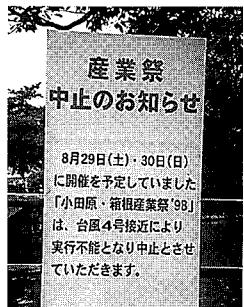
8/1 小田原市観光案内所オープン



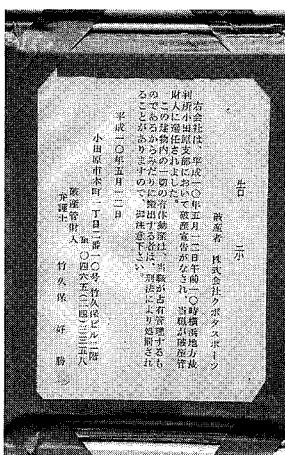
7/18 三の丸売店オープン



8/12 大松明



8/29～30 産業まつり中止

クボタスポーツ
5/12
破産

8/31 志澤閉店

落穂集

神奈川選挙区の確定得票

(改選3、立候補15、投票率55.70%)

当	當	民	新	新	現
◎	640,463	浅尾慶一郎	共	新	現
◎	527,799	畠野君枝	民	現	新
◎	510,371	千葉景子	共	新	新
◎	502,712	ツルネン・マルティ	自	新	新
◎	463,193	斎藤阿部	由	新	新
◎	298,244	牧島高坂	諸	新	新
◎	286,604	佐藤内	諸	新	新
◎	241,189	杉内	諸	新	新
◎	27,335	高野	諸	新	新
◎	19,567	橋本	諸	新	新
◎	14,842	高野	諸	新	新
◎	12,360	橋本	諸	新	新
◎	10,272	高野	諸	新	新
◎	8,686	橋本	諸	新	新
◎	2,149	高野	諸	新	新
		余			
		[投票総数] 308万7990人			
		[有効投票] 356万5711人			
		[無効投票] 12万701人			

(改選3、立候補15、投票率55.70%)

県内比例代表 党派別確定票

得票右欄は得票率%

カッコ内は前回得票率

白公 43 (54.744 14.23(20.71))

民公 41 (476,740 13.28(—))

共産 312,450 8.70(16.87)

社民 565,210 15.71(9.94)

新進 381,210 6.62(—)

社会 35,407 1.26(6.85)

新進 39,516 1.10(—)

二院之 55,570 1.55(5.02)

青白 14,500 0.40(0.36)

女性労 47,642 1.33(—)

自由 23,377 0.65(—)

新風 5,133 0.14(—)

スポーツ 29,681 0.83(1.36)

六年前の昭和五十七年三月二十五日には、小田原城お堀端の桜は満開であったことを記憶している。年月日までハッキリ覚えているのは、ある出来事に関連してのことであるが、或いは、十六年前が、桜前線観測史上一番早かつたことになるかも知れない。今年は、桜だけではなしに緑の花があり、咲くのが早い。この四月七、八日に歴史を愛好するグループで甲州方面を巡検したが、桃の花が満開で盛んに授粉作業をしている農家の人々を見かけた。今から

二十五日には、小田原城お堀端の桜は満開であつた。確かに今から六年前の昭和五十七年三月二十五日には、小田原城お堀端の桜は満開であったことを記憶している。年月日までハッキリ覚えているのは、ある出来事に関連してのことであるが、或いは、

六年前の昭和五十七年三月二十五日には、小田原城お堀端の桜は満開であつた。弘前城の桜は観測史上二番目に早いとテレビで放映された。確かに今から六年前の昭和五十七年三月二十五日には、小田原城お堀端の桜は満開であつた。弘前城の桜は観測史上二番目に早いとテレビで放映された。

宮の桃の満開は、一週間早いことになる。○花を早く咲かした天候は異常であった。今年の梅雨入りは、六月始めて平年より早かつた。しかし、梅雨明けは中國、近畿、東海地方では平年より十日以上遅い七月三十一日、関東では例年より十二日遅い八月二日であった。東北、北陸は「梅雨明けは特定出来ない」と梅雨明けは不明になつてしまつた。それに、今年は台風が北上するにつれて関東、東北地方それに静岡

国、近畿、東海地方では平年より十日以上遅い七月三十一日、関東では例年より十二日遅い八月二日であった。東北、北陸は「梅雨明けは特定出来ない」と梅雨明けは不明になつてしまつた。それに、今年は台風

が北上するにつれて関東、東北地方それに静岡

中国を初めバングラデシュ、韓国、北朝鮮などアジア諸国での発生を伝えている。人知を越え予測できない気象は如何ともし難い。○さがみ信用金庫では、九月二十八日、箱根信用金庫吸収合併と共に、営業時間を午後六時まで延長した。顧客へのサービスのためであることは云うまでもないが、営業時間は、銀行が三時まで郵便局が四時までのことで

九年までの間に詠んだものの中から選んでいます。結社「潮音」の人達の象徴的な感覚の歌の多い中で、私の歌は、平成四年から平九年までの間に詠んだものの中から選んでいます。結社「潮音」の人達の象徴的な感覚の歌の多い中で、私の歌は、平凡な老年の日常を詠んだもので、視野の狭さ、感覚の古さが思われる谦虚に申されるが、著者自身の目で周辺の種々を見てきた平明な歌である。その平明さにおいて「生き」主人石井富之助さんの『小田原叢談』に連載中の「小田原叢談」と何か共通するものがある。

それにも生涯学習の良き手本を示されている著書である。

新刊紹介

◇歌集 時の移ろひ

著者 石井 初子
A5 二毛ペーパージ
非売品

発行所 短歌新聞社

一部の「郷の歳月」と二部の「風の行方」に分け三百七十首を收める。

著者は、傘寿記念として第二冊目の歌集「如月考」を平成三年に発行しているが、今年の春NHKの「歴史への招待」を面白く読み終えたところ、まだ出来る

を見れば勤め人には、便利な時間延長である。○小田

原市内国道一号線沿いの電柱埋設工事が、昨年来進められていたところ、この九月、本町の大部分の電柱が地下に埋設され、スッキリした景観になった。○小田

原大橋からの道路拡張が寿町まで延長。

お詫び

前号の会員の訃報中、故・伊勢治書店取締役社長大嶋保孝氏を

享年五十二歳とあります。したが、五十七歳が正しいので、ここに謹んで訂正申し上げます。



◇句集 一支流

著者 鳥海 正樹

A5 一八ページ
発行所 有本阿弥書店 価格 三、八〇円
著者は、「鷹俳句会」の同人、昭和四十二年から平成九年迄の作二百九十二句を収め、末尾に「北原白秋と俳句」を掲げる。

俳句の門外漢が見ても確かに力強い男の俳句であることはすぐ分かる。それに独創であるとの賛辞もさることながら、作者が既に他の人が踏み分けた道を辿るのを避け、苦労しながらも新しいものを生み出そうとする創造への探求心には、感銘を見る。

鷹俳句会を主宰する藤田湘子は、本書の始めに次の
ような讃を寄せている。

「……見た通りどれも並
の俳句ではない。力があつ
て男の俳句だということを
実感させてくれるが、それ
以前に、どれもこれも独創
的である。……」

沼津史談 平成十年三月
第49号 集発行 沼津史談会 B5 86ページ

◇伊豆史談
編集発行 伊豆史談会
三島市大宮町一十一十五
藤池康義方 B5 第二二七号
平成十年三月
一香貫手城山を中心として
武田・北条の境目を歩く
三島傘の思い出
土屋比都司

酒匂史跡巡行

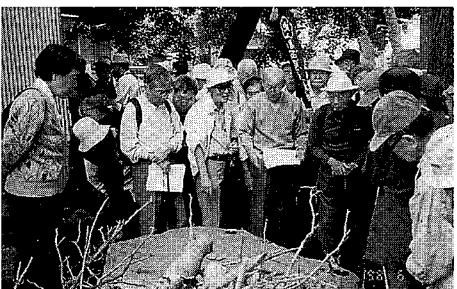
平成十年六月十二日（金）
酒匂「いそしげ」十時集合
【講師】川瀬速雄氏
十時～十二時 コース、展示
示品の解説
十三時より十五時三十五分

寺—法善寺—下輩寺跡—南
藏寺—上輩寺—藤野銘水氏
による錦心流琵琶『平家物
語』の一節の演奏（鎌倉・劇團
作家湯山浩二氏の紹介による）
後解散。

【参加費】会員は無料
【参加者】瀬戸君代、安藤
茂美・峰三、内田美枝子、
蛭間節子、名和稔雄、中野
文子、三橋国雄、湯川玲子、
山口一夫、内田公子、吉池

酒匂神社にて

上輩寺にて



清、額田好男、和田治助、小林房子、本多トキ工、岸本武、穂坂笑子、佐宗正雄
早野廣司、相原俊夫、中野恒郎、曾我保夫、早川初枝
石川夕力子、平井幸之助、勝俣淳一郎、石井啓文、大木充由、木村恵二、佐々木正孝、杉浦恵二、岡部忠夫
落合清、向山重忠、瀬戸長治、田口鏡子、伏見弘、伊藤岩恵、原正、大川勉、高橋佐年、形岡タミ子、園庭幸子、中村俊郎、石綿勉
湯山浩二、藤野銘水、下川環、横沢正美、佐藤昭善、内田清、日野泰輔、青木良一、下川茂三郎、杉山正善
以上五十六名

山北方面史跡巡り

平成十年七月二十一日(火)

【講師】藤井良晃氏

【コース】山北駅駅前

時十分集合—河村城址—老

人憩いの家(昼食)

【河村氏、鉄道物語】(続)

て川瀬鳳山氏の自作河村城

の朗詠)一穴口・川村土功

の碑十三時五十分現地解

散。その後、吉池清氏の案

内で希望者十二名が洒水の

瀧見学。

【参加費】会員は無料

【参加者】高橋佐年、安藤

峰藏・繁美、勝俣淳一郎、

横沢正美、椎野晴夫、早野

廣司・尊子、田中静雄、寺

田正、吉池清、剣持圭介、

川瀬速雄、曾我保夫、志沢

麗子・他三名、勝俣末子、

中野恒郎・文子、片岡タミ

子、内田美枝子、内田雅廣、

石川タカ子、加藤松江、木

村芳子、時田和子、佐宗清、

妙子、志村久、武靜子、剣持芳枝、石塚たのみ、富田千春・きみ江、和田治助・

中川亮太、岡部忠夫、山口一夫、大木充由、岩本武、

伏見弘、小栗良英、佐宗正雄・一二三、伊藤石恵、増山晶子、青木靖、小林房子、

本多トキ江、小笠原嘉代子、

湯川玲子。

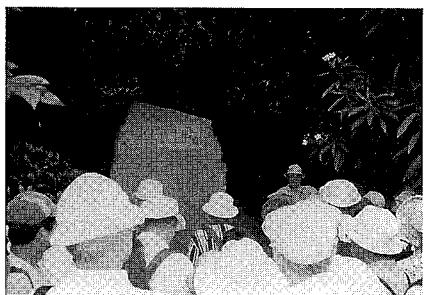
(以上五十三名)

(順不同敬称略)

河村城址公園入口にて



川村土功之碑前にて



特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキクリニック
熱海 アオキクリニック
足柄香粧株式会社
飛鳥屋 鮎
紳士服のアメリカヤ
(株)アルファ
伝統工芸 石川漆器(株)
税理士 石原和夫事務所
伊勢治書店
伊豆箱根トラベル 小田原営業所
画材 ガクブチ ヴィラス
かまぼこ
小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社オートセンター・スキヤマ
小田原中央青果 株式会社
オリオン座 清施
かまぼこ籠
今掌施
鐘紡株式会社 小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業 株式会社
木地挽 日下部産業 株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小国伊勢屋
伊府津館
小松石材店
さがみ信用金庫
趣味のふくらい

正榮堂
杉山水道工業
小田原名古屋まばこ
瓦寿堂
大不動産
打そとん 小田原城趾前
割烹ある
△△△
茶半家具
ちゃん里う
土谷建設
角田ガクフチ店
東京電力(株)小田原営業所
株式会社 東華物
ト一ホー建つ
鳥和八八菜
萬小ナ
平井書
富士写真フィルム
株式会社 報徳
建築金物(株)星崎仲吉商店
学生専科 九
諸星運輸
株式会社 美濃屋吉兵衛商店
学生専科 九
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
株式会社 ユアサコーポレーション
防災器具 優光社

小田原製作所